
A.O.G -Agent Of God- ~ 真剣で代行者に恋しなさい! ~

反省猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A・O・G - Agent Of God - 真剣で代行者に恋しなさい！〜

【Nコード】

N9214Y

【作者名】

反省猫

【あらすじ】

初めましての方は初めまして、知っている方はどうも反省猫です。色々思う事もあり、新たに書き直し+新しい話を書き足し、題名も少し変えました。という事で新しくなったA・O・Gをよろしくおねがいします。

この作品は真剣で私に恋しなさい！の二次創作小説です。

オリ主最強・チート・バグ・原作ブレイク・キャラ崩壊苦手な方にはおすすめできません。

そむきまごころよりのなほ 暇ひびくこころのなほ

第1話 『神の代行者へエージェント』 (前書き)

この作品は真剣で私に恋しなさい!の二次創作小説です。

オリ主最強・チート・バグ・原作ブレイク・キャラ崩壊苦手な方には
おすすりめできません。

それでもいいよという方は、暇つぶしにどうぞ〜

第1話 『神の代行者へエージェント』

なんでこうなった……

俺は今何も無い真っ白な空間にいる。

そして目の前には俺と同じくらいの金色の長い髪に青い瞳の美しい女性がこちらに微笑んでいる。

さかのぼる事30分前……

（回想）

俺の名前は、てんじょう天錠 あきり暁

アニメとかゲームなどを愛するいわゆるオタクと言われる大学生だ。

前々からほしかったゲームを買って意気揚々と自宅に帰る途中、

少年達が集まって何かをやっていた。

俺は、少年達が集まっている隙間から覗くと少年達の中央に

服を着たうさぎのような変な生き物が少年達に虐められていた。

暁

「なんだ？ あの生き物は？」

俺は不思議に思いながらもなぜか見過ごせない感じがして、

少年達にちょうど持っていたカードゲームのレアカード数枚を

少年達に渡し、その不思議な生き物を助けた。

良く見ると左前脚を怪我していたので、とりあえず

家に連れて帰り、怪我の手当てをした。

すると驚くべき事が起きた。

???

「いやあ、助かりました。貴方は私の命の恩人です」

その助けたウサギもどきがしゃべり始めたのだ。

暁

「うお！　しゃ、しゃべった！」

俺は、突然の事で思わず腰を抜かした。

???

「あ、申し遅れました！　私、わたくし神の従者いひやくしをしております稲葉いなばと申します」

そう言つて稲葉と名乗つたウサギもどきが丁寧にお辞儀をした。

俺もすぐに姿勢を正し

暁

「あ、これはご丁寧に、俺の名前は、天錠 暁です。よろしく」
そう言ってお辞儀を返した。

今、神の従者とか言ったか？ 暁は目の前の自称神の従者の稲葉をじいーと見ている。

稲葉

「それにしても、貴方は最近では珍しい奇特な方ですね。
大抵の人はそのまま素通りか、見ても見ぬ振りをしていましたの
に」

暁

「いや、俺はただ見過ごせなかつただけですよ」

暁は謙遜したが、本当は彼の過去にその理由があった。

彼は大切な人を目の前で亡くしたのだ。

稲葉

「御謙遜を。あなたは私を助け手当までしてくだされました。本当に感謝いたします」

そう言ってお辞儀を下げた。

暁

「いや、当たり前前の事ですから、頭を上げてください」
そう言うと稲葉はじいーっと品定めする様に暁を見ている。

暁
「な、何か？」

暁はその行為にたじろいだ。

稲葉

「ふむ、あなたならわが主に会わせてもいいかもしれせん」

今、神と言ったか？ 神…… 神……

暁

「えええええ！！！！ マジですか？」

稲葉

「ふふふう、はい！ では行きますよ」

暁

「い、行くなって、どこに？」

稲葉

「いわゆる天界というところですよ、では……」

暁

「ちょ、ちょっと！！ まだ心の準備が……！！」

稲葉

「いえ、善は急げと申しますから」

暁

「いやいやいや……」

稲葉

「ええい、往生際の悪い！ 行きます！」

暁

「うわあ〜!!」

稲葉に右肩をタッチされた瞬間、1人と1匹はどこかへ転移した。

.....

.....

暁

「うんん…… 二二は…… どこだ？」

俺はどうやら気絶していたらしく、目が覚める真っ白い何も無い空間に横たわっていた。

???

「目は覚まされましたか？」

突然誰かからそう訊ねられ、俺はビクツとなり、声のした方向に目を向けた。

ちょうど自分の前方に一人の美しい女性が立っていた。

その傍らに稲葉も立っている。

暁

「貴方がもしや……」

???

「はい、申し遅れました第1級多世界管理者ルカ＝ツヴァイト＝ル
ミナスと申します。」

いわゆる貴方達の世界の言葉で言うのならは【神】です」

そう言っつて微笑んだ。

……っと言っつた感じで回想終了。

暁

「貴方が神で名前がルカ＝ツヴァ……」

ルカ

「あ、ルカでいいですよ。名前結構長いですし……」

暁

「じゃ、ルカさん。俺の名前は……」

ルカ

「天錠 暁さんですよね？ (ニコッ) 知ってますよ」

暁

「(赤面) / / /」

暁は、女性の免疫がない事はないが、どちらかと言えば苦手だ。

ルカ

「稲葉を助けて頂きありがとうございます」

そう言っつて暁に頭を下げた。

暁

「あ、当たり前的事をただけですよ。お気になさらず（赤面）／／」

ルカは、じいーと上目使いで暁を見た。

暁

「う…… な、何でしょう？」

ルカ

「うふ、合格！」

暁

「……へ？」

暁は間抜けな声を上げた。

ルカ

「暁さん、単刀直入に申します。私の代わりに他のセカイを廻っていただけませんか？」

暁

「はあ〜？ セカイを廻るう？」

ルカ

「そのままの意味です。本来なら私が行かなければならないのですが、

今ここを離れるわけには行かないので、代わりに行ってくれる人を探していたんですよ。」

そう言って、ニッコリ微笑む。

暁

「で、でも、俺、何の能力もない普通のしがない大学生ですよ。」

ルカ

「それなら心配しなくても大丈夫ですよ。私が貴方に必要な能力を与えますよ。」

それを聞いて暁は一瞬考えた。

能力がもらえる？

暁

「……その能力というのは、人を救えますか？」

その問いに一瞬キョトンとなったルカはすぐ笑みを浮かべ、

ルカ

「はい、救えますよ。」

暁は過去の出来事を思い出していた。

暁は、大規模なテロで両親を失った。

その時思った俺にもつと力があれば大切な人を助けられたかもしれないと

暁は、真剣な表情になり、

暁

「そのお話お受けします」

ルカ

「それでは今から貴方は、私の代行者です」
エージェント

そして暁は神の代行者エージェントになった。

それからルカにこの依頼の詳しい内容を聞いた。

簡単に言うところだ。

俺は、他のセカイをただ廻るのではなく、

そのセカイで発生したイレギュラーを取り除く事。

そして、壊れた部分があれば修正する事。

この2つが大きな目的だ。

次にそのセカイで俺には役が与えられる。

その役をやりながらセカイでの任務を遂行する事になるのだ。

またその役の許容範囲なら何をしてもかまわないらしい。

ただし、人を殺すなどの事は禁止だ。

ちなみにそのセカイで協力者をいくら増やしてもOKらしい。

それを理解した上で頷いた。

ルカ

「次に貴方に授ける能力ですが、なんか希望がありますか？」

暁

「そうだな。身体能力上昇にして修業とかすればそのまま反映されて強くなるかな。となる成長率限界突破。

それと初期の能力は、これから行くセカイの最強と同質な感じで。後は、ありとあらゆる知識と技術」

ルカ

「ふむふむ、他には？」

暁

「毒とかの状態変化無効でそれと不死にしてみらえますか？」

後は、戦闘能力向上。魔力と気両方無限状態で

そしてこれが一番の願いです。

アニメやゲームなどの必殺技や魔法とか使えるようにして

下さい！」

ルカ

「ふむふむ、それじゃ希望したものと私からのプレゼントで創造の力と貴方の魅力を最大値にそれとこれはおまけです」

そういつてルカは目を瞑り、何やら眩いている。

ルカ

「我^{わが}…… 力…… かの者に…… 与えん!!」

ルカがそう言った瞬間、暁の全身が光り輝く

暁

「ッ……!!」

暁は、光が収まるまで目を瞑った。

そして光が収まるとルカが口を開いた。

ルカ

「ふう〜、今ので能力を付加しました。その証に」

そう言つとルカが指を鳴らすと暁の目の前に大きな姿見が出現した。

暁

「証? これつて!?!」

暁は驚いた。顔は元々F ?のセイロス似のイケメンだったので変わってないが、

髪と瞳の色が変化していた。

髪は金髪、瞳の色は赤になっていた。

ルカ

「ふふ、それが代行者の証です」

ルカは微笑みながらそう言った。

暁

「これが代行者の証……」

暁がそうつぶやくと

ルカ

「では、早速ですがあるセカイに言っただきます」

その言葉に暁は、ルカに視線を向ける。

暁

「どのセカイにいくんですか？」

ルカ

「あなたに行ってもらうセカイは、【真剣で私に恋しなさい！】と似たセカイです」

暁

「へ？ まじこいに似たセカイって？」

ルカ

「はい、どうやらそのセカイに、イレギュラーが発生しているようです」

暁

「ふむ、わかりました。行きます！」

暁は気合いの入った声でそう言った。

ルカ

「ふふふ、ではゲート開きます」

ルカは、また目を瞑り何か呪文を唱えた。すると

暁の目の前に魔法陣が出現する。

暁

「これがゲート…… では、行ってきます」

ルカ

「はい、いつてらっしゃい」

ルカが笑顔で送り出してくれた。

暁は、ゲートの中に入りそして消えていった。

暁が行った後、

稲葉

「彼、連れてきた私が言うのもなんですが大丈夫ですかね」

その言葉にルカは笑みを浮かべ、

ルカ

「きつと大丈夫よ。だって彼は……」

その言葉に稲葉は驚くのだった。

b e c o n t i n u e d

t
o

第1話 『神の代行者へエージェント』（後書き）

暁「おい、駄作者……」

作者「な、なんでしょう?」

暁「いきなり全部書き直すな〜!!」

作者「ご、ごめんなさい(TOT)」

暁「泣いてすむと思ってるのか、ああん(怒)

いままで読んで下さった方々に申し訳たたねえだろうが!」

作者「おっしゃる通りです>(――) <――」

ルカ「まあまあ、暁さんそこまでにしなさいな。

きつと何か理由があるんでしょう?」

作者「ルカさん(涙)」

ルカ「キモいから近づかないでもらえます(笑顔)」

作者「ひ、ひどい」

暁「理由ねえ、何あるのか?」

作者「ありますよ〜色々と」

ルカ「色々とは?」

作者「まず、このPrologueだけど

セカイを廻る理由が詳しく書いてなかったり、他にもルカの性格とかね。

自分で書いてて違和感がw」

ルカ「それで私の性格と言葉使いが前と変わっているのですか」

暁「そういえば、そうだよな」

作者「それ以外にもいろいろあるので、修正するより

一から書き直したほうが早いと思ったので、

今回のような事になったのですよ」

暁・ルカ「なるほど」

作者「それとPrologueでまだ付け加えたい話もあるのも理由です」

暁・ルカ「ふむ、話は分かった。とりあえずまずは

読んでいただいた人達に謝罪をしなさい」

作者「はい……、今まで読んでくださいました方々

申し訳ありませんでした。AOGは前よりももっといい

作品になるようにこれからも精進させていただきます」

作者「残りの話に着いても明日の夜もしくは明後日までには書き上げたいと思います」

作者「これからも新しくなるAOGをよろしく願います」

作者「では、次回 Prologue 第2話 【新しい家族】で

お会いしましょう！」

暁・ルカ「では次回までさようなら」

第2話 『新しい家族』（前書き）

神の代行者となった天錠 暁は、ゲートを通りまじこいのセカイへとやってきたが……

第2話 『新しい家族』

暁
「ルカさん、一つ聞いていいか？」

暁は念話である質問をする。

ルカ
「はい、なんでしょう？」

暁
「(なんで……！ 俺、子供になってるのお……！)」
そうなのである。

暁の姿はなぜか子供になっていた。

ルカ
「(それはですね、このセカイの役のせいです)」

暁
「(このセカイでの役？ そっいえばなんか説明でいったな)」

ルカ
「(ええ、今回のこのセカイでの貴方の役は、風間ファミリーの
員及び先導者です)」

暁
「(風間ファミリーの一員はわかるが、先導者とは？)」

暁は、理解不能といった表情でルカに聞く

ルカ

「（風間ファミリーのみならず、その周りの人々も色々問題あるでしょう？）」

そう言われて、暁はゲームの内容を知っていた為か思い当たる点が多々あった。

暁

「（ふむふむ、それで？）」

ルカ

「（あなたには、彼らをいい方向に導いていただきます）」

暁

「（なっ！！）」

暁は絶句した。

オイオイ、まじかよ。

暁

「（俺がそんなことしていいのか？）」

ルカ

「（ええ、お願いします）」

それを聞いて「はあ」とため息をついた。

暁

「（かなり問題が山積みだが……やりがいがありそうだ!）」

暁は、口の端を上にあげ笑った。

ルカは、その答えを聞いて喜んでいいる感じだった。

暁はふとある事に気付いた。

暁

「（そういえば、俺はどこに住むんだ?）」

ルカ

「（それでしたら……）」

ルカから家の住所を聞き、最後に意味深な言葉を聞いた。

ルカ

「（ちなみにご自宅のほうにサプライズなプレゼント用意していますので……）」

暁

「（プレゼント?）」

ルカ

「（はい！ きっと気に入ってくれると思いますよ）」

そう言ってルカの念話が途絶えた。

暁は早速聞いた住所を頼りに今から住む我が家へと向かった。

暁

「聞いた住所だとこの辺だが……あつた！」

そこは、1人に住むには大きい西洋建築の屋敷だった。

暁

「間違つてないよな？」

屋敷をじいーと見ていると

玄関から一人のメイドがやってきた。

???

「暁様、お帰りなさいませ」

暁

「えーと、あなたは？」

???

「本日より暁様にお仕えさせていただきます【さえは冴場 りよつか涼香】と申します」

暁

「え？」

メイドさんが俺に仕える？

マジですか？

暁がポカーンとしていると

涼香

「旦那様と奥様がお待ちです。どうぞこちらへ」

暁

「あ、はい」

涼香と名乗るメイドさんに案内され、

屋敷の中に入り、大広間の扉の前に着いた。

涼香さんは扉を開け、俺達は部屋の中に入る。

部屋の中に入った暁は自分の目の前にいる人物達に目を疑った。

暁

「父……さん…… 母……さん……」

そこには死んだはずの父親の天錠 総一と母親の天錠 結華が立っていたのだ。

総一

「暁、久しぶりだな」

父、総一はそう言い、

結華

「暁、元気だった？」

母、結華は微笑みながらそう言った。

暁は、わけが分からなかった。

二人はあのととき死んだはずだ。

暁

「な……ん……で……」

総一

「冴場君、席をはずしてくれないか？」

涼香

「はい、かしこまりました」

そういつて総一達に一礼し、涼香さんは部屋から出て行った。

それを確認して総一が口を開いた。

総一

「神様が、私達をこの世界に記憶のあるまま転生させてくれたんだ」

暁

「なっ！ 神様ってルカさんの事？」

その問いに二人は黙って頷いた。

暁

「い、一体どういう事？」

暁は混乱していた。

まったく意味が分からないと言った表情でそう言った。

総一

「それはなく、父さんと母さんが神の代行者とそのパートナーだからだ」

暁

「な、何イイイイイ!!!!!!」

部屋中に暁の驚く声が響いた。

ルカ

「…………それは、私が説明しましょう」

突然、ルカの立体映像がそこに現れた。

暁

「ル、ルカさん!?!」

ルカ

「暁さん、先程はどうも (ニコッ)」

いつもの笑顔でルカは言った。

そしてルカの表情は真剣な表情に変わり、

ルカ

「まず事の始まりは、あの大規模なテロです」

暁

「！」

ルカ

「実はあれはテロではありません」

暁

「テロじゃないって……」

暁は動揺を隠せなかった。

ルカ

「あれは、【敵】の仕業です」

暁

「【敵】？」

ルカ

「はい、私と対極の位置にいる者、名を【ネガ・マリス】」

暁

「ネガ・マリス……」

暁が敵の名を呟くと総一が、

総一

「ルカ、そこからは私が話そう」

暁 「父さん……」

暁は、父のほうに顔を向けた。

総一 「ネガ・マリスは、恨み・悪意などの人間の負の感情が集まった集合体が、神格化したものだ」

暁 「なっ！」

総一 「俺達は奴と戦い、奴を倒した。……そのはずだった！」

総一は、険しい表情になり、手を強く握った。

暁 「そのはずって…… 生きていたの？」

総一 「ああ」

総一 「そして、奴は関係ない人達を巻き込み、あの事件が起きた……」

暁 「……」

暁はあの時の事を思い出し、顔を下に向けた。

総一

「実はあのとき、お前も死んでいたんだ……」

暁

「ッ！！！　なんだって……」

暁は驚きを隠せなかった。

俺はあの時死んでいた？

では、なぜ俺は生きてるんだ？

暁が考えていると

総一

「私達は、自分達の命を使い、巻き込まれた人達とお前を助けたんだ」

暁

「……」

じゃ、何かあ、

両親が死んだのは俺とその人達を助けたせいという事か？

暁は、呆然とした。

総一

「今、お前、自分のせいとか思ったんじゃないだろうな」

総一は怒ったような顔でそう言った。

暁

「で、でも事実なんだろう？」

すると結華は近寄り、暁を抱擁し、頭を優しく撫でた。

結華

「貴方が気に病む事はないのよ。私達はあなたに生きてほしかったから……」

暁

「で、でも！」

暁がその続きを言おうとしたが、結華がその続きを言わせない。

結華

「暁、親というものはね、子供の為なら命を賭けて護るものなのよ」

暁

「母さん……」

母親は、小さい子供をあやす様に優しく頭を撫で続けた。

暁は、母親に撫でるのを止めてと手を出し、

真剣な表情で

暁

「話は分かったよ。俺がそのネガ・マリスを倒せばいいのか？」

ルカ

「いえ、今奴を倒す事は出来ないわ」

暁

「なぜ！」

暁は、声を荒げる。

総一

「奴は、負の集合体だ、人の負の感情が無くならない限り倒す事は不可能だ」

暁

「じゃ、何か父さん！ このまま指をくわえて見てろっていうのか！」

暁は、総一に詰め寄る。

総一

「そう熱くなるな、暁 絶対倒す方法はあるはずだ。今は、イレギュラーとバグの対応を優先するんだ」

それも聞いて、暁は納得してなかったものの

暁

「わかった……」

悔しい表情でそう答えた。

それから親子3人は、今までの事を話した。

暁

「そうか、父さん達はもう力があんまりないんだね」

父達は、あの事件で大半の力を使ってしまい、今では、川神鉄心に劣るものの釈迦堂クラスの力は持っていた。

総一

「といっても弱くはないぞ」

結華

「ふふ、そうね」

暁

「じゃ、俺が何とかするしかないのか」

ルカ

「そうですね、このセカイでは暁さんが頼りです」

暁

「ん？　なんか気になる言葉を聞いたような……　このセカイではとは？」

ルカ

「ああ、それなんです、貴方のほかに神の代行者があと7人います」

暁 「……はい？ 俺入れて8人いるの？」

暁は軽く驚いている。

ルカ

「ふふ、はい」

微笑みながらそう答えた。

暁

「俺…… 正直いらなくない？」

ルカ

「いえ、他の方々も他のセカイで手いっぱいでしたので、それに暁さんの場合、代行者最強の総一さん達の力を
受け継いでますから」

軽い爆弾発言だ。

それで俺は選ばれたのか。

少しおかしいな〜と思ったんだよ俺。

暁

「あれ〜？ おかしいな〜 今変な事を聞いたような〜」

暁はとぼけている。

総一

「事実だ。お前に俺と母さんの力を半分ずつやった」

暁

「まじですか？」

そう言つて、母を見ると微笑みながら頷いた。

暁

「だ、だけど今まで俺そんな力使えなかつたけど……」

総一

「ああ、それはな。俺がルカに頼んで封印してもらってた」

暁

「オイ！」

暁は突っ込んだ。

ルカ

「力の封印なら能力を渡すときに解きましたよ？」

暁

「な、なんだつて!!」

暁は今日だけで驚きの連続だった。

暁

「な、なんか驚きすぎて疲れた……」

総一

「あ、そうそうお前に一つ言い忘れてた」

暁

「もう大抵の事では驚かないよ、俺」

暁は疲れた顔でそう言った。

総一

「お前には妹がいます」

暁

「へ………？」

結華

「今年の春、生まれたのよ。名前は、【天錠てんじょう 桜華おうか】」

暁

「俺に妹が……」

それを聞いて

暁

「これからは、また家族と暮らせるのか……俺？」

総一

「ああ」

結華

「ええ」

暁の目から涙がこぼれた。

それを慈愛の眼差しで見っていたルカは

ルカ

「いいプレゼントだったでしょう?」

ルカのその問いに暁は涙を服の袖で拭き、元気な声で

暁

「ああ!」

こうして暁は、再び家族と暮らせるようになったのだった。

c o n t i n u e d

t
o
b
e

第2話 『新しい家族』（後書き）

作者「まさかの両親復活と妹の存在、いかがだったでしょうか？」

暁「俺も驚きまくって疲れたわ（ー；）」

作者「そうはいつでも嬉しいでしょう？」

暁「ん、まあーな」

作者「テレてやんの」

暁「う、うるさい!!」

作者「とりあえず、主人公いじりはここまでにして」

暁「（作者、いつか滅する）」

作者「敵の存在が明らかになったね」

暁「ネガ・マリスだっけ？」

作者「そうそう」

暁「あれって、名前の由来あるの？」

作者「あれはね、負の英語訳の negativeと悪意の英語訳の maliciousと繋げただけ」

暁「結構単純なネーミングだな」

作者「それでもかなり強いよ」

暁「まじで?」

作者「まじで」

暁「……と、とりあえず次回予告を」

作者「あ、ごまかしたね」

暁「うっさい!」

作者「こほん……では、次回 第3話『業火の中で』でまたお会いしましょう!」

暁「では次回までさよなら」

第3話 『業火の中で』（前書き）

ということだ、あの人物との物語です。

第3話 『業火の中で』

あれから4年の歳月が過ぎた……

ここはアメリカのLA。

今日は父に連れられ知人の会社の操業20周年の記念パーティーに行くことになった。

まさか、うちの父親の職業が、世界屈指の財閥、天錠コンツェルンの総帥とは……。

元いたセカイでも父親の商売の才能は群を抜いてたからな。

リムジンに乗り、40分後、会場のビルに着いた。

父親もキリツとした表情になり、営業用の顔になる。

俺も一応、大財閥の御曹司の為、キリツとした感じを出す。

会場に着くといろんな人達が、寄ってくる。

富豪A

「これはこれは、天錠さん、今日も凛々しくらっしゃる」

総一

「いえいえ、そんな事は」

婦人A

「またまた御謙遜を。あら？　こちらの子は？」

総一

「私の息子の暁です。暁、挨拶なさい」

そう促され、暁は人を魅了する微笑みで

暁

「天錠　暁です。父がお世話になってます」

婦人B

「あら、理髪そうなお子様ね、おほほほ」

暁

「（あー、やだやだ。この人達、わかりやすいおべっか使いやがって）」

暁は心の中で毒づいた。

そして、会場を見渡すと気になる少年を見つけた。

暁

「（銀色の髪の毛のツンツン髪、あれはもしかして……）」

暁は、周りの人に「失礼」と言って抜けだし、その少年に近寄った。

暁

「あのすいません」

??

「ん？」

暁に呼びかけられてその少年がこちらの方を向いた。

暁

「私の名前は、天錠 暁と申します」

??

「おお！ 総一殿のご子息か！ わが名は、九鬼 英雄！」

暁

「（やっぱり……という事は、ここがああ事件の現場か……）」

英雄

「暁殿。どうかなされたか？」

暁

「いや、何でもありません。ところでどうも殿とか付けられるのは慣れてないので

私の事は、暁と呼び捨てでかまいません」

英雄

「暁殿がそう言うなら、これからは暁と呼びましょう、それと我と話す時は、敬語でなくてもよい」

暁

「わかった。そのほうが助かる。どうもこうという場所は苦手で」

英雄

「フツハハ！！ 場数を踏めば、苦手も気にならなくなるよ」

暁

「そこまで慣れたくないんだが」

英雄

「貴校は、面白い人物のようだ。我と友になってくれぬか？」

そう言つて、英雄から手を前に出される。

暁

「ああ、喜んで！」

暁は前に出された手を握り返し握手をした。

ちょうどそのとき

ズドオオン！

何かが爆発したような音が会場全体に響き、入り口付近から煙が入ってくる。

婦人A

「キヤアアアア！！！！！！」

婦人Aが悲鳴を上げる。

英雄

「な、何事だ！」

ズドオン！ ズドオン！ ズドオオン！ ……………

英雄がそう言った直後、連続して一斉に爆発音が鳴り響き大量の煙が会場に立ち込め、

爆発音がした部屋から炎が上がる。

暁

「この音は……爆弾か！」

英雄

「何イ！」

暁

「とりあえず、ここから脱出しよう」

英雄

「うむ」

そう言っつて、英雄の左手を握り、走り出す。

出入口付近には、人々が我先にと出入口口に殺到している。

そして、自分達がいる反対側から爆弾の爆発音がした

ズドオオン！

逃げ遅れた人が爆発に巻き込まれ、吹っ飛ばされる。

英雄

「人が……」

総一

「おい、暁！」

総一が二人に駆け寄ってくる。

暁

「父さん！ 英雄を頼む。俺は逃げ遅れた人を助けに行く！」

総一

「……わかった。必ず生きて帰ってこい！」

暁

「ああ！」

英雄

「無茶だ！ 暁は我と同じ子供ではないか！

総一殿はご自分のご子息が心配ではないのか！」

英雄は総一に抗議する。

総一

「あの子なら大丈夫だ……」

その理由を知らない英雄はその言葉に怒りを覚える。

英雄

「我也助けに行く！」

そう言っつて、暁が向かった方向に走っていく！

総一

「あ、英雄君、待て！」

総一の制止を振り切り、英雄は暁の方へ進んで行く。

そのとき、前に進んでいた英雄の近くで爆弾が爆発した。

英雄

「ぐわ〜」

英雄は吹き飛ばされ、吹き飛ばされた場所に尖った瓦礫があり運悪く、

英雄の左肩と左腕に突き刺さる。

英雄

「ぐっ！！」

物凄い強烈な痛みを感じる。

そして最悪な事に他の部屋から発生した火災がこの会場まで燃え広がりが会場全体が火の海になった。

一方その頃、

暁は、吹き飛ばされた人々を救助し、ビルの外にでた。

暁

「父さん〜！ あれ英雄は？」

総一

「あれ？ 暁と一緒にじゃないのか？ 自分も助けに行くと
暁を追って行ったぞ」

暁

「なんだって！ なんで止めなかったんだ！」

総一

「止めたさ、しかし、会場にはいなかったし、
外に出たんじゃないかと思って探しに来たんだが」

その言葉を聞いて、暁は舌打ちし

暁

「チツ！ 俺探してくる！」

総一

「今、ビルの中は火の海だぞ。それにまだ爆弾があるかも知れん
だぞ！」

暁

「心配するな、俺を何者と思ってる」

その言葉を聞いて総一は小さく息を吐き、

総一

「フ、いらぬ心配だったな」

そして暁は再びビルの中に入って行ったのだった。

英雄 side

英雄

「ぐっ!!!」

左肩と左腕の傷と血が大量に出て、意識を持っていかれそうになっ
たが、

英雄は、だらんとした左腕を右手で押さえ、出口を目指す。

英雄の周辺は火が燃え盛り、炎の壁となって行く手を阻む。

英雄

「チィ！ 我は……こんなところで倒れるわけにはいかぬ！」

英雄には夢がある。

【世界一のプロ野球選手】という夢が…。

英雄

「我は絶対生きてここから出る！」

英雄は一步步を歩を進める。

ちょうど暁より先に救助に来ていた女性が一人

女性

「おい、だれがいるか！」

女性は生存者がいないか大声で呼びかける。

その声に英雄は、

英雄

「ここにいるぞ！　ここだ！」

女性

「！　あっちか！」

女性は目にもとまらぬ速さで英雄の所まで移動した。

女性

「大丈夫か！　酷い怪我じゃないか！」

英雄

「心配いらん！　ただのかすり傷だ」

女性

「嫌、どう見ても重傷じゃねーか。ホラ、肩を貸してやる、歩けるか？」

そう言って、女性は肩を貸した。

英雄

「かたじけない」

女性

「にしてもその怪我で良く動けたな」

英雄

「我には、夢がある。その夢の成就の為にもここで死ぬわけにはいかぬ」

女性は驚いた。

まだ小学生のガキなのにここまで確固たる信念と気高さを持っているこの少年に

思わず、尊敬を覚えた。

英雄 side out

二人はようやく出口へとたどり着いた。

女性

「もう少しで出口だ。がんばれ！」

英雄

「ああ！」

出口に辿り着いた瞬間、部屋の上部が崩れ、大きい瓦礫が落ちてくる。

女性

「チィ！」

持っていた2本の小太刀を抜き、大きい瓦礫を目にも止まらぬ速さ

で切り裂いた。

しかし、続けて又別の瓦礫が複数上から落ちてきた。

女性

「対応が追い付かない！」

英雄

「ここまでか……無念！」

そう言って、英雄は目を閉じる。

しかし、二人と瓦礫の間に誰かが立ちふさがった。

それは英雄が良く知る人物だった。

英雄

「あ……あ……暁！」

暁

「もう大丈夫だ！ 英雄」

そう言うと暁は、二人を担ぎあげ、光の如く、瞬く間にビルから脱出した。

そして、誰もいない公園の芝生の上に英雄を置いた。

女性

「お前は一体……」

暁

「ん？ 英雄のダチだ！（この女性は……）」

髪は長いが後に英雄の専属メイドとなる忍足 あずみだ。

たしかこの時期は、大佐（『君が主で執事が俺で』参照）の傭兵部隊にいたんだっけ？

暁

「こんな事をしてる場合じゃない」

英雄の怪我を見ると重症だった。

暁

「仕方ない、ここで応急処置をする」

あずみ

「応急処置だと？」

あずみは何言ってるんだこいつと言わんばかりに疑わしい目で暁を見た。

暁はそれを気にする事無く何もない空間から医療機器を出した。

あずみ

「な！ 一体どこから出した」

暁

「細かい事は気にするな！ 英雄、麻酔なしでやるからじっとしてろよ」

英雄

「つむ……」

暁

「（こいつはやばいな、意識を失いかけている。血も結構出てたからな）」

そう思いながら、鮮やかな手際で傷の手当てをした。

英雄

「ぐあああああ……!!」

英雄の左腕と左肩に凄まじい激痛が走る。

数分後、応急処置は完了した。

あずみは信じられないとばかりにあっけにとられていた。

暁

「（このままだと野球ができなくなりそうだな。仕方ない、あれを使うか）」

暁は、左腕の傷口に手を当て、

暁

「治癒巧！」

そう言った瞬間、暁の手から緑色の気を出し左腕に送り込む。

あずみ

「な！ 氣だと！」

英雄

「これは！」

あずみと英雄は驚いた。

小学生くらいの少年がセカイでも使える者が少ない、氣を使っているのだ。

驚かない方がおかしい。

左腕に氣を送り込むのが終わると次に左肩に氣を送り込んだ。

数分後

英雄

「礼を言う、暁。お前は命の恩人だ」

英雄は暁にお礼を言った。

暁

「よしてくれ、友達を救うのは当たり前だろ？」

それに礼を言うならこの人にもお礼を言ってくれ」

英雄

「そうであったな、救助の方、礼を言う」

あずみ

「礼には及ばないよ、任務だからな。それよりそのガキ、お前一体何者だ？」

暁は、その言葉にニイと口の端を吊り上げ、

「俺の名前は天錠 暁、英雄の友人で代行者エージェントさ」

あずみ

「天錠…… そうか、お前が天錠コンツェルンの！」

暁

「そういうことさ、あずみさん」

あずみ

「！」

あずみが小太刀を構える。

あずみ

「なぜ、私の名前を」

暁

「それは、大佐さんと知り合いだからさ」

あずみ

「なるほどね、たしかにお前の親父さんと大佐は友人関係だから、私の名前を知っていても不思議じゃないか」

そう言うとあずみは小太刀を収めた。

暁

「うんじゃ、あずみさん。英雄を病院に連れて行ってやってくれ」

そう言っつて、暁は父のいる方向へ歩き出す。

あずみ

「ああ、わかった」

英雄

「暁！ また会えるか？」

その問いに

暁

「ああ！ また会えるさ！」

暁は背を向けたままそう答えた。

後日、

英雄の怪我の具合を聞いた所、

左肩と左腕ともに問題なく順調に回復し野球もできるみたいだ。

よかったよかった。

後から聞いた話だが、英雄の怪我の治療をした先生が、

医者

「こんなに見事な応急処置を私は見た事がない」

と褒めてたらしい。

さて、そろそろ風間ファミリーのメンバー達と接触する為、日本に移動しますか。

t o b e c o n t i n u e d

第3話 『業火の中で』（後書き）

作者「ということで、英雄とあずみ登場でした」

暁「やっとまじこいのキャラがでてきたよ」

作者「まあね」

暁「でもこの話を書いたってことは…… Prologueはこれで
終わりか？」

作者「ああ、そうだよ次から第1章、やっと主要メンバーでできま
す」

暁「おお！」

作者「あと、技とか人物とかはまたあとで紹介したいと思います」

暁「ふむふむ」

作者「ということで次回、第1章 第1話 『風間 翔一と直江
大和』でまた会いましょう」

暁「では次回までまたな」

第1話 『風間 翔一と直江 大和』（前書き）

というところで、風間ファミリー初期メンバーの二人の登場です。

第1話 『風間 翔一と直江 大和』

両親と別れ、俺は冴場 涼香さんを含む12名のメイド達と

LAから日本へと引っ越した。

目的地は川神市。

今度住む場所は、将来【チャイルドパレス】が立つ土地をうちが買取り、

屋敷を建てた。

それは俺の決意の表れだった。

暁

「（絶対、冬馬達を救ってみせる！）」

引っ越しの片付けも一段落し、俺は行動を起こすことにした。

暁

「涼香さん、ちょっと出かけてくれるね。」

涼香

「お一人ですか？ 最近物騒ですから、誰か護衛を付けましょうか？」

暁
「んーまあ、一応大丈夫だけど、誰か付けてもらえる？」

涼香
「それでは、来夏にお願いしましょう。来夏」

涼香が呼ぶとメイド NO.2の南雲なぐも 来夏らいかが一瞬にして現れた。

来夏
「呼びましたか、涼香？」

涼香
「ええ、暁様の護衛をお願いします」

来夏
「了解しました。暁様、では参りましょう」

暁
「ああ、お願いね、来夏さん」

暁が微笑みながらそう言った。

来夏は、少し頬を赤く染めて、

「こほん、では、参りましょう／＼」

そう言って瞬く間にまたその場から消えた。

暁

「では、いつてきますー!」

涼香

「いつてらっしやいませ〜」

涼香に見送られて暁は目的にの空き地を目指す。

15分後、

暁は目的地の空き地に着いた。

来夏さんも暁が呼べばすぐ跳んで行ける距離にいる。

暁は、空き地を見渡し、目的の建造物を見つけた。

それはダンボールで出来た俗に言うダンボールハウスだった。

暁は、ダンボールハウスに近づき、少し開^あいているドアの隙間から中を覗いた。

すると中に暁と同じ歳のバンダナの少年が何かをしていた。

暁

「（あれがキャップか〜 声をかけてみるか?）」

そう思いながらドアを開けた。

翔一

「誰だ!」

暁
「ごめん、ちょうど散歩していたらこのダンボールが目に入って、これって君が一人で作ったの？」

翔一
「ああ、俺一人で作った！ それとこの名前は【風雲風間城2号】だ！」

暁
「2号？ 1号は？」

暁は首をかしげながら言った。

翔一
「作った次の日に行ったら知らないおっさんが住んでたからあきらめた」

それを聞いて、暁は納得したような表情で

暁
「なるほどね」 にしても所々やばい箇所があるな」

翔一
「なんだと！ 俺の作ったのにケチをつけるのか！」

翔一は、自分が一生懸命作った物にケチをつけられ怒っている。

暁
「怒ったなら、謝るよ。俺ならこの城をもっと頑丈にできるよ」

翔一
「本当か！どうやるんだ？」

暁
「ああ、それはね……」

それから俺たちは、風間城の補強案について大いに語り合った。

翔一
「おまえ、いろんな事知ってるな、友達になつてくれないか？
俺この町に来たばかりだから友達いないんだ」

暁
「俺でよければ、喜んで。俺の名前は、天錠 暁だ」

翔一
「アキラだな。俺の名前は風間 翔一ってんだ！」

暁
「ならシヨウだな！ よろしくな！」

翔一
「ああ！」

そういつて、握手を交わした。

それからいろんな話をした。シヨウは、親父さんと旅から旅の生活を送っていたそうだ。

で、シヨウの親父さんが、そろそろ腰を下ろすことになり、この町

に引っ越してきたのだ。

翔一

「おまえ、天錠グループの総帥の子供なのか。すげーな！」

暁

「凄いのは、父さんのほうさ、俺が偉いわけじゃない」

翔一

「じゃ、将来親父さんの会社継ぐのか？」

暁

「将来、継ぎたいと思ってる」

翔一は、その答えを聞いて、

翔一

「そうなのか、じゃ、会社継ぎ前に一緒に旅にいかねえか？」

暁

「ははは！それもいいな。考えておくよ」

翔一

「楽しみだぜ！」

暁

「ああ！」

そう話していると外に誰かがいる気配を察知した。

「俺達と同じくらいの少年か。ここにきたという事は……大和か！」

「誰か外にいるみたいだ」

「ん、誰だ？ 出てみるか？」

「ああ」

二人が外に出るとそこには、荷物を持ったニヒルな感じの少年が立っていた。

少年の名前は、直江 大和

話を聞くとどうやら家出をしてきたらしい。

「俺は、母親がうるさいから家出したんだ。しかし、俺は冷静な子供だ。あまり遠くに行く俺の経歴に傷が付く」

「お前、アホだろ？」

大和

「アホとはなんだ！」
あほと言われ、大和は怒っている。

暁

「アホはアホだ。冷静ならそんな事はしねえよ。
それに家出ならもつと遠くに行け。
母親に探してほしいのが丸わかりだ」

大和

「ぐっ……」

大和は、凶星を言われ黙った。

暁

「お前、人生は、死ぬまでの暇つぶしとか考えてねえよな？」

大和

「実際そうだろ？」

暁

「だから、お前はアホなのだ！ そんなこと考えてたら、人生かなり損するぞ」

大和

「何？」

暁

「いいか！ 人生というのは長いようで短い。

お前にも夢があるだろ？ それを叶えるためには並大抵の努力じゃないし、

夢によつては、専門の知識と経験も必要だ。

人生を死ぬまでの暇つぶしと言ってるやつは、その時間すらも無駄にしている。

まず、その考えを捨てる！ 後、そのニヒルな感じはキャラか？ はつきり言つて、お前に似合つてないしかなり痛いぞ。

実際のお前はそんな奴じゃないだろう？」

大和は、自分がいままでカッコイイと思つていた事をかなり痛いと言われ、

自分の考えも否定された。

だが、不思議と怒りがこみ上げて来ない。

それは大和も無意識のうちに自分は間違っているんじゃないかという考えがあつた証だつた。

大和

「じゃ、どうすればいい……？」

大和が暁にそう訊ねると

暁

「夢の為な努力と労力を惜しむな！ 必要な知識も学べ！ ダメだつたときなんか考えるな！」

常に前向いて進め！ そうすればいつかその夢に手が届く！」

その答えを聞いた大和は、

大和

「お前、名前は？」

暁

「俺の名前は、天錠 暁」

大和

「アキラ……俺をお前の弟子にしてくれ！」

暁

「弟子！？なんでまた？」

大和

「お前は、俺の知らない知識をたくさん持っている。それにお前が師匠なら俺の夢に近付ける気がする。」

暁

「夢？どんな夢だ？」

大和

「総理大臣になってこの日本を変えたいんだ！」

暁

「へえー、これまた大きな夢だな。半端な道のりじゃないぞ？」

大和

「覚悟してる。険しい道だと思うけど、どうしても俺はその夢をかなえたい！」

暁

「そうか……わかった。俺の弟子にしてやるよ」

大和

「ほ、本当か！　ありがとうございます。アキラ…いや師匠！」
なんか大和がうれしそうにそう言った。

翔一

「おまえも面白い奴だな！　俺は風間　翔一！　よろしくな！」

大和

「俺は、直江　大和。　直江　兼続の直江に大和魂の大和だ！」

暁

「大和か、よろしくな！」

暁は大和の前に手を差し出す。

大和

「これからよろしくお願ひします師匠！そして翔一！」

大和は、暁の手を握り返し握手をした。

暁

「ああ！」

翔一

「おう！」

こうして俺は、その日のうちに友人と友人兼弟子を手に入れたのだ。
った。

e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.....

t
o
b

第1話 『風間 翔一と直江 大和』（後書き）

作者「という事で、キャップと大和登場の回でした」

暁「なんか大和、弟子になつたぞ？」

作者「あーいいのいいの、大和のあの性格私嫌いだし、とりあえず、更生させないとねと思つたんで今回この話になりました」

暁「なるほどね、そういえば一子達は？」

リメイク前のやつでは、やつつけて感じてたけど？」

作者「それなら次の話でワン子・ガクト・モロの加入の話ですよ。まあやつぱ、やつつけじゃなく真面目に書いたほうがいいうな気がしたしね」

暁「なるほどね」

作者「まあ、話長くなるから読んでくれる方には申し訳ないけどね」

暁「まあね」

作者「ということで、次回 第2話 『風間ファミリーのはじまり！』でまた会いましょう！」

暁「じゃ、次回までまたな」

第2話 『風間ファミリーのはじまり!』 (前書き)

今回は、風間ファミリー結成時の残りのメンバーの加入話です。

第2話 『風間ファミリーのはじまり!』

風間ファミリーは3人からはじまった。

まず俺、天錠 暁と、風間 翔一、それから直江 大和。

あの出会いから良く遊ぶようになっていた。

リーダー気質のキャップと補佐気質の大和、それと両方を補佐する俺、

3人の相性がよかつたんだろう。

翔一

「駄菓子屋いこーぜ。ピックリマンのキラあてんぞ」

大和

「カードの位置に法則があるんだ。新品の箱にしようぜ」

暁

「買うのはいいが、良く考えてから金使えよお前達」

キャップが俺達をリードする感じで楽しかったが、

二人が暴走しそうなときは俺が止めていた。

そんな俺達3人をじーっと見ていたのが岡本 一子。

のちに川神院に引き取られることになる女の子だ。

翔一

「お、なんだお前。俺達と一緒に遊ぶか？」

一子

「え……」

キャンプの良いところは、こつこつ風に

爽やかに人に手を伸ばすことだ。

一子

「うんっ！」

ワン子はうれしそうにその手をとった。

こうして、ワン子も俺達と遊ぶようになった。

一子

「女の子と遊ぶより大和達と遊んだほうが楽しいわ！」

俺達は、他愛もない会話をしていたときちょうどワン子の話題になった。

大和

「へー、今までは違うところにいたんだ」

一子

「うん、おばーちゃんがひきとってくれた」

ワン子は、孤児院からおばあさんに引き取られてここに移って来たらしい。

ワン子の孤児院の話は面白かった。

一子

「それでね、リクオっていうやつが俺はコックになるって包丁いじっちゃって……」

大和

「お前のいた孤児院バイオレンスだなあ」

翔一

「ワン子泣き虫だからイジめられてたろ？」

一子

「タツちゃんがいるから平気だったよ」

源 忠勝、のちに風間ファミリー入りする漢である。

暁

「（それが原因で忠勝のやつは、一子に兄って感じでしか見てもらえないんだよな）」

報われねなあ………」

暁が忠勝の事を考え込んでいると

一子が暁に寄ってきて、

一子

「どろしたの？」

不思議そうに暁に聞いた。

暁は、すぐに何とも言えない表情から優しい表情になり、

暁

「いや、なんでもないよ（ニコッ）」

そう言っただけ微笑みながら、優しくワン子の頭を撫でた。

ワン子は、子犬のように気持ちよさそうに目を細める。

翔一

「本当にワン子は犬みたいだなあ」

大和

「たしかに！」

そう言っただけ、大和が笑う。

一子

「ん？」

ワン子はどろやらかってないようだ。

暁

「（まあ、そこがかわいいんだけど）」

どっちら俺もワン子に甘いらしい。

俺は苦笑するのだった。

俺達4人はフリーダムなキャップとわんぱくなワン子、

それらの暴走をおさえる俺達、という感じでまとまっていた。

ワン子は元気ではあるが、よく泣いていた。

翔一

「いえーい！俺またつめえ棒当たりー！」

翔一は嬉々とした感じでそう言った。

一子

「なんでそんなにいっぱい辺りが出るのよう………」

大和

「あ、今回俺も当たった」

翔一

「俺と大和仲間ー。ワン子1人だけ仲間外れー！」

一子

「うわーん！ー！」

ワン子は大声で泣き出した。

暁

「俺もはずればっかだから、ワン子と同じはずれ仲間だ。

だから、泣くな」

本当は1回当たっていたが、ワン子にはだまっていた。

ワン子

「……本当？」

暁

「ああ！ だから泣くな」

それを聞いて、ワン子は服の袖で涙を拭き、

ワン子

「うん！」

そう言っつて、笑顔を見せてくれた。

感のいい大和は、俺が本当は当たってたのを気付いてたみたいだが、黙っててくれた。

俺達は何もするにも一緒だった。

商店街にやってくる知り合いの本屋の店長が声をかけてきた。

店長

「おお、お前ら元気のいい4人だなあ！」

そう言って、

店長

「でも俺の店の前で遊ぶなバツキャロー!!!」

と怒られた。

翔一

「それー！　たいきゃーく！」

一子

「わー！　まってよー！」

大和

「お騒がせしましたー！」

暁

「本当にいつもすいません、今度また本買いにきますので！」

店長

「おう！　貴重なお得意様だからなおまえはでもまた店の前で遊んだら

承知しねーぞコンチクショウ！」

暁

「はい！」

そう返事をして、暁は店長に頭を下げ仲間の元に向かった。

店長はそれを見送って

店長

「あの風間ってのは悪ガキになりそうだが、それと天錠のほうは

あの歳でしっかりしてるなあ」

店長の人を見る目は確かだった。

岳人

「おいてめえ風間！ クラスの女子に少し
人気あるからって調子乗るなよ！」

浅黒の背の高い少年、島津 岳人がキャップに絡んできた。

翔一

「別にのってねーよ。お前が勝手に怒ってるんだろ」

キャップは呆れ顔でそう言った。

岳人

「けつ、覚悟しろ。ブツ飛ばしてパンツ脱がせて泣かせてやるぜ。ふへへへ！」

どこかの三下の悪党みたいな笑い方をしてそう言った。

翔一

「面白いな、喧嘩は負けた事ないぜ」

それを聞いてガクトは、

岳人

「そりゃ今までの相手が弱いからだ」

岳人がそう言うのとキャップは真面目な顔になり、

翔一

「いや、喧嘩売ったら死にそんな奴が仲間に住るんで……」

暁

「（そういえば、この前、DBのかめはめ波撃って見せたら、全員驚いていたな……）」

ガクトは、その言葉に首をかしげたが、

岳人

「ん？ 俺様は……強えぞ！！」

一子

「あわわわわ、あ、暁と大和どうしよう？」

暁

「心配するな。危なくなったら俺が止める」

そう言っつて、動揺しているワン子の頭を撫でる。

暁

「それにうちの軍師がなんとかするだろ」

暁は、大和を横目でちらりと見ると

大和

「（こつこつという手合いは策で八めるに限る）」

何か策を思いついたみたいだ。

大和

「……では喧嘩で勝負をきめようか。殴り合いだよ」

大和

「夕方5時に空き地にきな！ にげるんじゃないぞ」

そう言っつて、ガクトを挑発する。

岳人

「面白い。上等じゃねえか、ひよろひよろ野郎」

そして決闘開始の夕方5時　。

岳人

「ぐお！？　なんだこれ落とし穴！？」

岳人はまんまと罠に嵌った。

暁は、呆れていた。

暁

「策ってこれだったのか……　はあ〜」

暁がため息をついた。

大和は5時までには空き地に落とし穴を作成しておいた。

翔一

「いい眺めだな！　行くぜコラー！！」

岳人

「やめ、ちょ、おま！　ヒキョーだぞ！」

翔一は、落とし穴の上から岳人に蹴りまくった。

暁は無言で、翔一に傍に行き、

一子

「暁？」

暁は、キャップの首根っこを持って上にあげた。

翔一

「ちょ、暁、なにしゃがる〜！」

大和

「そうだよ、師匠」

翔一と大和が抗議してきたが、一瞬二人を睨むと黙った。

暁は、ため息をつき、

暁

「たしかに自分より強い奴には策を用いるのは有効だ。

だが、相手一人に大勢でいたぶるのは、おかしくないか」

そう言うと、二人ともシユンとしている。

暁

「そこのお前もこれじゃ、嫌だろう？」

ガクトにそう言うと

岳人

「ああ！ 納得できねえ！」

それを聞いて

暁

「俺がこいつの相手をしよう……」

その言葉に

翔一・大和

「イイイイ！！！！」

キャンプたちはガタガタ震えていた。

岳人は、その様子を不思議そうに見ていたが、

この後、なぜ彼らが震えていたのか知ることになる……

……

岳人を落とし穴から引き揚げてから

お互い正面になるように向きあい、

岳人

「お前が相手あ！ 俺は強えぞ！」

暁

「俺は、まあまあ強いぞ」

そう言って、喧嘩が始まった……

1分後、ガクトはブルブルと震えていた。

そして

岳人

「申し訳ありませんでした！！」

それはそれは綺麗な土下座だったという……。

それからあまりにも不公平なので、もう一度仕切り直し、

キャップと岳人にタイムマンで決着を付けさせ、

お互いに認め合う所を見つけたようぞ

そしてその結果　。

一子

「わわわ何か来たよ」

岳人

「よっ、今日から俺様達も遊びにませろよ」

岳人

「島津　岳人だ。んで、こいつもいれてくれ、ダチの」

卓也

「師岡　卓也、よろしくね」

翔一

「おう歓迎するぜ」

キャップは二人を歓迎した。

一子

「がるるっ！」

ワン子はなぜか岳人を威嚇する。

岳人

「なんだこの生き物は」

大和

「新入りに負けないよう気を張ってるのさ」

岳人

「面白い生き物だ。よろしくなオイ」

卓也

「仲良くやろうね」

暁

「ああ、俺は、天錠 暁だ、よろしくな二人とも」

するとガクトは、暁の目の前に立ち、すぐさま土下座し、

岳人

「あなたの強さに惚れた。弟子にしてくれ！」

暁

「はい？」

こうして俺は、また新しい弟子が出来たのだった。

これで6人。

これが風間ファミリーの始まりだった……

c o n t i n u e d ……

t
o
b
e

第2話 『風間ファミリーのはじまり!』（後書き）

作者「ということで、題名変わってますが、気にしない方向で」

暁「気にするわ!」

作者「私少し勘違いしてたんですよ」

暁「勘違いとは?」

作者「原作で最初の5人のときに風間ファミリー結成したと思ってたんですが、

もう一度、やり直したら、百代と京入ってから後でした」

暁「ああ、だから結成じゃなくてはじまりに変えたのか?」

作者「はい、そうです」

暁「そう言う事が」

作者「疑問に思われた読者の皆様申し訳ございません」

暁「これで俺入れて6人と言う事は次はあの人登場?」

作者「はい、そうなんです。あの子の登場です。

ということで、次回 第3話 『百代登場! 暁VS百代』で
またお会いしましょう!」

暁「次回までまたな〜!」

第3話 『百代登場！ 暁VS百代』 (前書き)

という事で、まじこいメインヒロインの一人、武神 川神 百代登場です！

第3話 『百代登場！ 暁VS百代』

風間ファミリー結成から数日がたったある日の事

同じ学校の違うクラスの同級生のグループが、俺が松笠に行ってる間に

助っ人の上級生を連れて俺達の秘密基地を奪おうと喧嘩を売ってきた。

なんとか追い払ったものの秘密基地は壊されてしまった。

翔一

「ちくしょう！ あいつら秘密基地壊しやがって！」

悔しそうに怒っている。

岳人

「まったくだぜ！ にしても人数が多すぎる！」

大和

「仕方がないよ、師匠がいたらあんなやつら倒せたけど、今、松笠に行ってるし（・・；）」

卓也

「たしかにアキラいるとすぐ決着付きそうだけど（・・）」

一子

「ねえ、キャップこれからどうするの？」

翔一

「大和、なんか策ねえか？」

大和

「んー、そうだな。助っ人頼むか」

一子

「助っ人？」

岳人

「大和く、なんか当てがあるのか？」

大和

「ああ、川神院って知ってるか？」

卓也

「武術の総本山でしょ？ 川神の人なら知らないはずはないよ。それがどうしたの？」

大和

「その総代の孫が俺たちの学校の上級生なんだ。名前はたしか川神 百代」

翔一

「たしかにそいつが助っ人してくれたら、鬼に金棒だな！」

大和

「助っ人の件は、俺が行ってくるよ」

岳人

「おう、任せたぜ！ 大和！」

とりあえず、川神 百代をする事に決定した。

そんなやりとりを遠くからじいーと見つめる少女が一人、

京

「……………いいなあ、楽しそう……………」

少女の名前は、椎名 京

後に風間ファミリーの一員になるのだが、それはまた別のお話……………

所変わってここは、川神院

武術の総本山にして、武の頂点。

多くの武術家が、今日も武の境地を目指して鍛練を続けている。

百代

「さてと、今日も走り込み行くか？」

やる気がない口調で山門を出ると一人の少年が門の前に立っていた。

大和

「すいません、ここに川神 百代って人いますか？」

百代

「川神 百代は、私だが？」

大和

「いきなりで悪いのですが、力を貸していただけませんか？」

そう言って、大和は頭を下げた。

百代

「ここではなんだ、近くの川原で話を聞こうか？」

大和

「はい」

そう言って、二人は、多馬川の川原に移動した。

川原に到着すると大和は、百代に助っ人の依頼をした。

百代

「それは、ゆるせないな、私は卑怯なやつや不誠実なやつが大嫌いだ。」

でも、何か見返りがないと私は手を貸さないぞ？」

大和

「では、報酬としてこれを」

そう言って差し出したのは、百代が集めている野球カードのレアだった。

百代は、上機嫌でこれを受け取り、

百代

「後、こっちからお前に条件がある。おまえ、私の舎弟になれ！」

大和

『舎弟ですか（汗）…… あの拒否権は？』

百代

「拒否した場合は、助っ人の件は無しだ」

大和

「わ、わかりました、あなたの舎弟になります」

その答えを聞くと百代は嬉しそうに

百代

『そうか！ 今日からお前は私の弟だ！ よろしくな、大和！』

大和

「よろしくお願いします！ 姉さん」

そういつて、握手を交わした。

百代

「あ、そうそう言い忘れてたが、もし契約を破ったらお前を髑り殺すからな。」

何度も言うが、私は不誠実なやつは嫌いだ！」

鋭い眼光で大和を見る。

大和

「は、はい………」

このとき、大和は心底後悔したという。

とりあえず合掌

チーン！

数日後、また例の同級生と上級生混合のグループが風間ファミリーに喧嘩を売ってきたが、

百代によって一瞬のうちに数人の同級生達は、倒されていった。

同級生 A

「い、痛いよ〜」

同級生 B

「う、腕が！！」

同級生 C

「こ、こいつ強え！！」

上級生 B

「止める、止めるよ〜」

百代

「命乞いは見苦しいぞ！」

百代は、殺気を放ちながら心底楽しそうに喜んでいる。

するとあちら側の上級生の男子が、

上級生 A

「俺は本当の悪だ。子猫や子犬でも平気で殺せる。お前も殺してやるぜ！」

しかし、両足が震えているので、ただのハッターだとすぐわかる。

百代

「悪ね、へえー、素敵だなあ先輩。デートしてくれ！」

大和

「あ、キレた」

翔一

「キレたなあ」

一子

「百代お姉ちゃん、怒ってる！」

岳人

「俺、知らねっと！」

卓也

「あーなったらもう止められないね」

風間ファミリーの面々は、完全に傍観者になっていた。

百代

「先輩、あそこの3階の屋根まで付き合ってくれ」

そういつて、近くの建物を指さし、その上級生の左足を持って、そのまま一瞬にして

近くの建物の屋根に飛び上がった。

風間ファミリー

「ま、まさか………!?!」

百代は、空気投げの要領で、上級生を屋根から投げ落とした。

しかし、予想もできない事が起きた。

?

「おいおい、ここまでやる必要はないだろう」

百代 side

大和の約束の通り、私は、風間ファミリーの用心棒になった。

風間ファミリーの連中は面白い奴らばっかだ。

まだ会ってないが、ファミリーの一人に物凄く強い奴がいるという。

何でも大和達と同じ歳らしい。

私より強いだろうか……それとも……

何にせよ。会うのが楽しみだ。

私が用心棒するようになって数日が過ぎた頃、同じ学校の馬鹿な連中達が私たちに喧嘩売ってきた。

その時、ワン子を上級生の一人が殴った。

その瞬間、私は怒った。

私の仲間に今何をした？

これは許せることではない！

とりあえず、向こうからやってきたんだ。

こちらのせいじゃない。

これは正当防衛だ。

私の仲間に手を上げたんだ。

お前達覚悟はできているんだろうなあ……！！

私は、そいつらの腕の骨を外していった。

上級生 A

「俺は本当の悪だ。子猫や子犬でも平気で殺せる。お前も同じ様に

殺してやるぜ！」

こいつは馬鹿か？そんなハツタリ私に効くか！

とりあえず、こいつはあの建物屋根から落そう。

そうしよう。

ただそのまま落してもおもしろくないので、

両足で着地できるように落すか。

百代

「先輩、あそこの3階の屋根まで付き合ってくれ〜（ニタあ〜）」

そういつて、近くの建物を指さし、私はそのバカの左足を持ちあげ、建物の屋根へと

飛び上がった。そして、私は躊躇なくそのバカを3階建の建物の屋根から投げ落とした。

しかし、予期せぬ事が起こった。

？

『おいおい、ここまでやる必要はないだろう〜』

なっ！ なんだこいつは？

私が助けたのを見えなかっただど？

私は、ただただ驚いていたが、やがて獰猛な笑みを浮かべた。

おもしろい！

こいつはおもしろいぞ！ たぶん実力は私と同等かそれ以上だ！

こんな近くに面白い奴がいたとは！

でも待てよ、あの少年の姿どこかで……

はっ！ こいつが大和が言ってたやつか！

ハハあ！ 本当に面白い！

私の興味は、今現れた少年に注がれ、

さっきまで相手にしていたバカ達の事など

どうでもよくなっていた。

百代 side out

一子

「ねえ、あれって……アキラじゃない？」

大和

「ああ、間違いない、師匠だ」

翔一

「おお！ 本当だ！」

岳人

「でも助かったぜ」

卓也

「本当だね、僕たちじゃモモ先輩止められなかったしね」

メンバーは安堵の表情を浮かべそう言った。

百代

「おい、そこのおまえ！ お前が天錠 暁か？」

暁

「ああ、そうだけど？ 君は？」

百代

「私は、川神 百代だ！」

この子が川神 百代かあ。

暁

「よろしく(ニコッ)」

暁は微笑みながら百代に手を差し出す。

百代は、暁のその微笑みに

百代

「お、おう、よろしく／＼ (なんか胸がドキンとしたぞ……！)」

「

動揺しながらも暁の手を握り返し、握手した。

暁

「とりあえず、その前に……」

そう言って、暁は相手グループのほうに向き、鋭い眼光で睨みつける。

相手グループ

「ひい！……！！！」

暁

「おい、おまえら、この前忠告したのよな？ ちよっかいかけるなつて！」

暁は、軽く殺気を放ち言った。

相手グループ

「す、すみませんでした」

相手グループ全員、暁に土下座した。

暁

「もう二度とちよっかいかけてくるな、もし、またしたら……わかってるな！（ギロリ）」

相手グループ

「はい、もうちよっかいかけません……！！！」

そう言っつて、暁が一息ついていると

百代

「おい、おまえ！ 私と勝負しろ！」

暁

「（さっそく、勝負を申し込まれたか。もらった能力試すにはいいか）」

暁

「いいよ。ここじゃなんだし、どっかいい所ないか？」

百代

「川神院はどうだ？ そこが家なんだ」

暁

「OK そこでいいぜ」

そのやり取りを見ていた他のメンバーは、

大和

「師匠、あっさり勝負受けたね」

翔一

「暁は自信があるんじゃないか？」

一子

「アキラ、凄いものね！」

岳人

「ああ、師匠ならモモ先輩に勝てるだろう」

卓也

「そうだね」

そう話ながら、風間ファミリーの面々は川神院に移動した。

川神院に着くと百代は大きな声で、

百代

「じじイ！ いるかあ！！！！」

そう呼ぶと立派な髭を蓄えた老人が奥の間からでてきた。

鉄心

「なんじゃい、百代騒々しい」

百代

「こいつと手合わせしたいんだ。審判してくれ」

鉄心

「ん？ どの子じゃ？」

暁

「はじめまして、天錠 暁と申します、お目にかかれて光栄です。」

そう言って、頭を下げた。

鉄心

「天錠……、そうか総一の息子か！」

暁

「はい、そうです」

総一から鉄心と知り合いというのをあらかじめ聞いていたので、

驚く事はなかった。

鉄心

「あ奴は元気か？」

暁

「はい、鉄心さんにあつたら息災と伝えてくれと父から」

鉄心

「そうか、そうか、儂の事は鉄爺で良いぞ」

暁

「では、鉄爺と今度から」

鉄心

「そうか、あ奴の息子か。ふむ……」

鉄心は、暁をじいーと観察するように見ている。

実力は百代と同等もしくは上か。

しかもこの小僧何かまだ隠しておるな。

流石は、【鬼神】と呼ばれた漢おんくの息子じゃわい……

これは、面白い試合が見れそうじゃ。

鉄心

「ふむ、よかろう。試合を許可しよう！」

百代

「本当か！ いくぞアキラ！」

百代は嬉しそうに暁の右手を握り、試合場まで引つ張っていく。

暁

「そんなに引つ張られても試合は逃げないぞ」

そういつて、鉄心を加えた風間ファミリーの面々は試合場に移動した。

試合場では、師範代の釈迦堂 刑部とルー・イ が、門下生の試合を見ている。

そこに鉄心達がやってきたので、何事かと二人の師範代は首を傾げた。

鉄心

「釈迦堂とルーこつちにきてくれ」

二人は、鉄心の元にやってきた。

釈迦堂

「総代、何か用ですかい？」

鉄心

「今から百代とそっちにおる少年の手合わせするんで、
門下生達の修練を一時やめてもらえんか？」

ル

「ハイ、わかりました。みんな、今の試合終わったら一旦終わる
ヨ」

そして門下生達の試合が終わると、門下生達は、試合場から出て行
き、

鉄心

「すまんのう、百代、アキラ君、試合場中央へ」

そう言うと二人は、中央でお互いを真正面にして向かい合う。

鉄心

「では、これより試合をはじめる！」

鉄心

「東方！ 川神 百代！」

百代

「ああ！」

鉄心

暁
「ふん!!」

突き出された百代の左足をそのまま掴み、地面に叩きつけた!!
試合場の地面に軽くクレーターができている。

百代
「グハあ!!」

暁は見下ろす様に

暁
「まだまだ終わりじゃないだろ？」

と百代を挑発する。

百代は、一瞬にして体勢を整え拳を構える。

百代
「ああ!!」

暁
「ハハ!そうこなくっちゃな!」

暁は、心底うれしそうに笑いながらそう言った。

二人の戦いはまだ始まったばかりだ……

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.....

第3話 『百代登場！ 暁VS百代』（後書き）

作者「という事で百代登場です」

暁「ふむ、俺出会っていきなりバトルなんだけど（・|・:）」

作者「まあ、いいじゃないか、そうしないと話が進まないんだから」

暁「それはそうだが、後、京ちよつとだけでてたね」

作者「今回はゲスト出演。出てくるの当分先だしね」

暁「ふむ」

作者「それまで連続でバトルが続きます」

暁「まじか……」

作者「まじです」

暁「オイオイ、連続はきついつて」

作者「大丈夫、お前若いから気力で行け！」

暁「それもそれでどうなんだろうね」

作者「さあね、うんじゃ次回予告行ってみよう！

次回、第4話 『暁の力』でまたお会いしましょう！」

暁「では次回までまたな！」

第4話 『暁の力』 (前書き)

暁VS百代の続きをどうぞ

第4話 『暁の力』

二人がお互いに向きあい構えたまま5分が過ぎた……

百代

「では、こっちからいかせてもらおうぞ!!」

そう言っつて百代は、掌に氣を貯め、

百代

「くらえー!!! 川神流・致死^{ちしほたろ}蚩^しう!!!」

百代の掌から無数の氣弾が、暁の方へ向かっていく!!

それに対して、暁は、目を瞑り、

暁

「喝っ!!!」

そう叫んで目を見開き、気合いだけで全ての氣弾を跳ね除けてしまった。

その光景に百代は、

百代

「オイオイ、気合いだけで私の致死蚩を跳ね除けるとは!」

百代は臆することなく、ニイと口の端を上げて笑う。

百代は、再び構えると

百代

「じゃ、これはどうだ！！！！ 川神流・星殺しい！！！！！！」

膨大な量の氣の奔流が暁を襲う。

それに対して、暁は、

暁

「ほおー、こいつは凄いねー、うんじゃこつちも氣を使った技を！」

暁は両足を前後に開いて腰を落とし、深く高い息吹の声を上げた。

特殊な呼吸法により全身に満ちた氣と魔力のエネルギーを束ね、

そこに攻撃的なイメージ 闘魂を吹き込んで【神氣】と化する。

脇に抱えた両手の間から目映い白色の光がほとばしった。

「 天錠式神飛拳！！ 」

暁はソフトボールほどの大きさに圧縮した神氣弾をアンダースローで

投げつけた。

すると百代が放った星殺しに命中し、相殺した。

その光景に試合を見ていた全員が驚いた。

鉄心

「な、なんじゃと……」

暁が使った技、その名も【神威の拳】

はるか太古から伝えられている幻の拳だ。

鉄心

「なぜ、あの技をあの少年が……」

一方、違う場所で見っていた釈迦堂とルーは、

釈迦堂

「なんだありや、ソフトボールみたいな気弾一つで星殺しを相殺し
ちまったぞ……」

ルー

「彼には、ただならぬ力を感じるネ……」

釈迦堂

「ああ、俺の禍々しい氣と正反対のなんというか清浄なる氣……」

二人の額から汗が流れる。

また違う場所で見っていた風間ファミリーは、

翔一

「くううく、やっぱすげーぜ！ 暁は……」

翔一は興奮している。

大和

「ああ、流石、師匠。かめはめ波撃てるだけあるぜ！」

大和は自分の事のように胸を張る。

一子

「暁は、本当に強いよね」

ワン子は感心している。

岳人

「俺も師匠とタイムマンした時、死ぬかと思ったぜ……」

ガクトはあの時の事を思い出したようで、ガクガクと震えていた。

卓也

「暁の場合、もう次元が違うよね（汗）」

モロは、考えるのを止めた様な感じでそう言った。

皆が皆、そんな事を話してる間にも試合は続いていた。

百代

「ハハハ！！ 楽しいな暁！」

暁

「ああ、でもそろそろ終わりにしよう。百代さん、一番強い技でこい！」

暁は百代を挑発する。

百代

「それは挑発か？ いいだろう！ では行くぞ！！ かわかみ 波あ！！！！！」

暁

「かめはめ波みたいな技だな。うんじゃ、こっちも、かゝめはゝめゝ 波あ！！！！！」

二つのエネルギー波がぶつかり、辺りは埃や煙でお互い視界が見えなくなった。

暁

「視界が見えなくなったか ん！！！！！」

百代が奇襲を仕掛けてきた。

百代

「これで終わりだ！ はああああああああ！！！！！！
川神流禁じ手・富士砕き！！！」

今までの技達より遥かに強力で膨大な氣を纏った一撃が、暁の腹に命中する。

百代

「（勝った！）」

百代は勝利を確信した。しかし、

暁
「ふむ、これが百代さんの一番強い技か…… たしかに強力な一撃だが、それだけだ」

暁は淡々とそう言った。

百代

「効いて……ない……だと」

暁

「まあ、でもせっかく百代さんが本気になってくれたんだ。俺もその本気に答えよう」

そう言うと暁は、身体中の神気を爆発させた。

その瞬間、氣を感じられる川神院総代、師範代達、そして百代は驚愕した。

百代

「どんどん氣が上がっていく…… これは……」

百代の身体がガクガクと震えている。

百代

「これはなんだ……？ 私は恐怖しているというのか？」

百代の視線は、暁のほうを向く、

鉄心

「まさか、これ程とは……」

釈迦堂

「おいおい、あの氣の強さ、総代並だぞ……」

ルー

「まさか、そんな子供がいるとは……」

暁

「百代さん、まだ一度も負けた事無いんだって？」

百代

「……ああ」

暁

「じゃ、はじめての敗北を味わってもらおうよ」

そう言つと暁の姿が消えた。

百代

「なっ！……！」

百代は、辺りを見回す。

すると暁が突然百代の目の前に現れる。

暁

「はあああああああ……！！！！ 機神拳無双奥義・真 霸 隴

撃 烈 破……！」

両手から龍の形をした氣弾を至近距離から百代に連続当て、

百代の身体を上空に押し上げる！

百代

「ぐっ！！！！」

百代は、直も続く無数の氣弾を受け続け、迎撃の態勢が取れない。

暁は、光ほどのスピードで、脚に神氣を纏い、

百代に強烈で重い飛び蹴りを撃ち込んだ！

百代

「ぐはぁ！！！！」

百代は、技を喰らい地面へと叩きつけられる。

百代は、ダメージが大きかったのか。そのまま意識を失った。

鉄心は、百代の状態を確認し、

鉄心

「勝負あり！ 勝者 天錠 暁！！」

そう高らかに鉄心は勝敗を告げた。

すると風間ファミリーから喜びの声が聞こえた。

釈迦堂 side

釈迦堂

「あのガキ、勝っちまいやった……」

最近、総代を除いてここまで強い奴を見た事がない。

しかも氣で言えば、総代クラスだ。

なんかおもしろいぞ、このガキ。

俺も死合したくなつたぜ！

そんな事を考えていると自然と獰猛な笑みが零れる。

それを見ていたルーは、

ルー

「釈迦堂、まさか……」

ルーは気付いたようだ。

ルー

「待て！ 釈迦ど……」

釈迦堂

「おい、暁と言ったか。どうだ俺と死合しないか？」

釈迦堂は獰猛な笑みを浮かべそう言った。

釈迦堂 side out

突然、師範代の釈迦堂 刑部から試合の申し込みを受けた。

でもこの場合、「試合」じゃなくて「死合」だよな。

鉄心

「これ、釈迦堂。いきなり何を言って「いいですよ」「何？」

鉄心が釈迦堂に抗議していると暁は、あっさりと了承した。

鉄心

「いいのか、暁君？」

暁

「はい、俺は構いませんよ」

釈迦堂

「随分余裕じゃねーか」

暁

「そついう、釈迦堂さんこそ……」

二人の間から気のせいだろうか火花が見える……

鉄心

「ふむ。なら許可しよう」

そう言うと気絶した百代を風間ファミリーのそばに置き、

鉄心

「それでは、これより第2試合 釈迦堂 刑部 対 天錠 暁の
戦を始める！」

鉄心

「それでは、東方！ 釈迦堂 刑部！」

釈迦堂

「おう！」

「西方！ 天錠 暁！」

暁

「はい！」

両者は中央で相對する。

鉄心

「それでは、はじめい！！！」

釈迦堂

「はあああああああ！！！！！！！」

暁

「はあああああああ！！！！！！！！！」

ダンッ！！

両者は、飛び出す様に相手に向かっていった。

そして両者の拳と拳がぶつかり、死合が始まった……

c o n t i n u e d ……

t
o
b
e

第4話 『暁の力』（後書き）

作者「ということで、百代に勝利した暁君」

暁「それはいいんだが、釈迦堂さんに絡まれたんだが……」

作者「仕方ないじゃん、戦闘狂なんだからあの人」

暁「たしかに（-|-;-）」

作者「まあ、がんばれや、主人公」

暁「なんかム力つくな」

作者「まあそれは置いといて、技の紹介などは、また別途で紹介します」

暁「あいあい」

作者「ということで、次回、第5話 『釈迦堂 刑部という男』でまたお会いしましょう！」

暁「じゃ、次回までまたな〜！」

第5話 『釈迦堂 刑部という男』(前書き)

暁 VS 釈迦堂の闘い、前編をどうぞ

第5話 『釈迦堂 刑部という男』

沖縄県、離島・黒門島。

神々が宿る島と言われし秘境……

島から遙か東の海は異界・ニライカナイに

繋がると言われている。

釈迦堂 刑部は、その島で産まれた。

釈迦堂の母は、1人の女の子を身籠っていた。

しかし、出産した時、産まれてきたのは2人だった。

医者から言われていた女の子となぜか男の子。

この男の子は、いったいどこから潜り込んできたのか。

母親が産気づいたのが、ニライカナイに一番近い東の

浜であった事から、彼は異界から来た者として

皆から、恐怖されていた。

生後2日にして、両足で立つことができた為、

皆、彼を恐れた。

“ お前は一体どこから来た ”

“ いきなり母胎に現れた、得体の知れない男の子 ”

強く異能がゆえに、彼もまた孤独だった。

異能であるがゆえ、人から恐れられ疎まれ、家族さえも

彼から離れて行った。

そんな幼少期、少年期を送った為、彼の心の闇はかなり深く濃くなる。

そして彼が青年になる頃には、暴力が常の毎日だった。

沖縄に台風のようなガキがいる噂を聞きつけてある老人が、彼を訪ねた。

鉄心

「お前さんか。沖縄近辺で台風のように暴れまくっているというガキは」

釈迦堂

「俺がガキ……ジジイ。てめえは何だ」

ガキと言われてカチンときている釈迦堂は、鉄心にそう乱暴に訊ねる。

鉄心

「井の中の蛙を痛めつけてやろうと思つてな」

そう、余裕シャクシャクで鉄心は答えた。

釈迦堂

「本当にそうだったら、嬉しいぜ」

殺気を鉄心に向けて放ちながら、低い声でそう言った。

釈迦堂

「…俺は負けた事ねえんだよ」

釈迦堂

「ここまで強いと虚しいレベルだ」

釈迦堂

「自分が誰かも良くわからねえし」

鉄心

「その強さ故の孤独は痛いほど、分かるわい」

鉄心はしみじみそう言い、

鉄心

「だから敗北を、教えてやる」

そう言い放った。言葉は直もつづき、

鉄心

「そしてお前はワシと一緒に川神院に来い」

鉄心

「武術の総本山じゃ。退屈せんぞ」

釈迦堂

「そいつは素晴らしいが…タカが知れてる」

釈迦堂

「……悪いがジジイに負ける気がしねえ」

何かあきらめた感のある声でそう言った。

鉄心

「なら、試してみよう。死合つぞ」

釈迦堂

「容赦しねえぞ」

鉄心

「行くぞ」

鉄心の氣が一気に膨れ上がる。

鉄心

「顕現の参・毘沙門天!!!」

釈迦堂は天から伸びた毘沙門天の巨大な足に踏み潰された。

0.001秒を切る圧倒的な速さの攻撃を釈迦堂は回避するのは不可能だった。

ドゴオオオン！！！

踏み潰された釈迦堂の周りとはとてもなく大きな足跡が残っていた。

釈迦堂

「…………ゴハツ！？ ぐは…………い、いでえっ！？」

鉄心

「ほっほっほ、おう、生きておるか。流石じゃのう」

鉄心は笑いながら釈迦堂に声をかけた。

釈迦堂はなんとか生きてるものの全身の痛みで動く事ができない。

釈迦堂

「て、てめえッ…………げはあっ、ぐ、うう」

鉄心の顔が真面目な表情に変わり、

鉄心

「己が分かったか、井の中の蛙」

釈迦堂

「…………ぐ、ふふ…………蛙か、俺が」

釈迦堂はそう言って、滑稽な自分を笑った。

鉄心

「川神院に來い」

鉄心

「お前より強い奴もいるぞい」

鉄心がにやりと笑い、それを見ていた釈迦堂は、

釈迦堂

「ははは、ははは、ふ、はははっ!!」

釈迦堂は、痛みをこらえながら盛大に笑い、

釈迦堂

「そうか、そりゃあいいや、楽しい!!」

怪物と言われた男は、愉快そうに機嫌が好さそうに笑っている。

こうして、釈迦堂は川神院へ引き取られた。

試合場では、暁と釈迦堂の乱打戦が繰り広げられていた。

釈迦堂

「はあああああああ!!!!!!!!!!」

暁

「おおおおおおお!!!!!!!!!!」

お互いの拳を繰り出している速さが常人ではもはや見る事の出来な

い速さになっている。

なので、両者の拳から腕半分が風間ファミリーの面々には見えていない。

岳人

「なんだ、ありゃー!!」

ワン子

「ど、どうなってるの?」

大和

「おそらく、俺達の目では見えない速さで殴り合ってるんだよ」

翔一

「すげー!!!」

卓也

「本当に睨って規格外だね」

一方、鉄心達は、

鉄心

「ほー、釈迦堂とここまでやりあうとはのう。
まあ、氣の量も然ることながら、
とてつもない戦闘センスじゃのう」

ル一

「はい、あそこまで釈迦堂と打ちあえるのは、
総代ぐらいでしたが、まさかあの少年が

「ここまでやるとハ……」

鉄心達は暁を感心していた。

死合は直も激しさを増して行き、

釈迦堂

「なかなかやるじゃねえか、暁!!」

暁

「釈迦堂さんこそ、流石は、川神院師範代だけの事はある!」

釈迦堂

「ははあ!! 褒めてくれるとはうれしいねえ、うんじゃ、お礼にこれでも喰らいな!! 川神流・蠍撃ちいつ!!」

そういうと、光のように速く破壊力のある正に会心の一撃と言える拳が、

暁の腹部目掛けて向かってくる。

暁

「うんじゃ、俺もお返しに!天錠式・蠍撃ちいつ!!」

同じ技で迎撃してくる!

釈迦堂

「何だっ!!」

鉄心

「な、なんじゃと……！」

鉄心もそれには驚いた。

川神流は、門下の者でないと教えられない門外不出の拳法だ。

それをたった今見ただけでやってしまった暁に鉄心及び師範代二人は驚きを

隠せなかった。

そして、お互いの拳と拳がぶつかり合い、凄まじい拳風が起こる！

釈迦堂

「オイオイ、シャレになんねえぞ。お前……」

釈迦堂は顔を引き攣ってそう言った。

暁

「ハハ……！ 驚くのはまだ早いけどね」

そう言って、ニヤリと口の端を上げ笑う。

お互い、拳を引かぬまま、睨みあっている。

暁が口を開く、

暁

「あんた、どうやら【力】を信用しきってるような目してるね」

釈迦堂

「だったら、どうした！ この世の中、力が全てだろう！」

暁

「ああ、それも否定しねえ……だがな……それだけじゃダメだ」

釈迦堂

「何？」

釈迦堂は暁を睨む。

暁

「あんたには、これといった信念がない！
信念の無いあんたの力など、紙も同然だ！」

それを言われ、

釈迦堂

「なら、てめえはその信念があるのかよ！」

暁

「ああ、ある！ 俺に勝ったら教えてやるよ！」

そう言って、釈迦堂を挑発する！！

釈迦堂

「お前が俺に勝つだと？ 寝言は寝て言えや！！」

釈迦堂から禍々しいとてつもなく大きい氣が放たれる。

暁

「寝言じえねーさ……事実だ！」

暁からも膨大な大きさの気が放出される。

釈迦堂

「なら、証明して見せやがれ!!」

暁

「ああ、言われるまでもねえ!!」

そして再び両者は、戦いを再開した。

b e c o n t i n u e d ……

t
o

第5話 『釈迦堂 刑部という男』（後書き）

作者「ということで、釈迦堂戦前編でした」

暁「釈迦堂さんにこんな過去がねえー」

作者「ちなみに釈迦堂さんの双子のお姉さんは、原作じゃ死んでますが
こっちでは生きてます」

暁「へえー、うんじゃ、いつか出てくるのか？」

作者「はい、かなり後ですが、できますよ」

暁「ほへー」

作者「ということで、次回で釈迦堂さんの死合の決着が付きます」

暁「それはいいけど、俺なんか口調荒っぽくなってないか？」

作者「それは問題ない。そういう設定だから」

暁「まじか……っっていうか設定言っな!!」

作者「ハッハッハ！細かい事は気にすんな）、*）dグツ！」

暁「あー、殴りてえ〜」

作者「さて、次回 第6話 『決着！そして現れた敵』でまた会

いましよう

では、私は暁に殴られそうなので逃げます、アデュー!!!」

暁「あ、こちら、待てえ!!! おっと、じゃ、次回までまたな

待ちやがれのこの駄作者あ〜!!!」

第6話 『決着！ そして現れた敵』（前書き）

暁 VS 釈迦堂の闘い、いよいよ決着の後編です。

第6話 『決着！ そして現れた敵』

釈迦堂

「なら、証明して見せやがれ！！」

暁

「ああ、言われるまでもねえ！！」

二人の氣が一気に高まる。

風間ファミリー達が見守る中、氣絶していた百代が目を覚ました。

百代

「…………痛っつ！ ……私は、はっ！！」

百代は、氣が付くと飛び起きる。

百代

「大和！ なんで、釈迦堂さんとアキラが死合ってるんだ！？」

百代は驚いた表情で大和に訊ねる。

大和

「あの釈迦堂って師範代が、師匠に死合おって誘ったのさ。

だから、師匠はそれに応じ、今の状況になってる」

百代は、その説明を聞くと試合場で繰り広げられている死闘に

目をやった。

試合場では激しい技と技のぶつかり合いが起こった。

釈迦堂

「はあああああ！！！！ リングううう！！！！」

8枚の光のチャクラム状の光弾が、暁を全方向から襲ってくる。

暁

「チィ！！ 天錠式神飛散弾！！」

ソフトボール位に圧縮した氣弾が破裂し、様々な方向へ飛び散っていく。

しかし、8枚のリングは、その飛び散った小さな氣弾を躲し、

暁の身体を切り刻んで行く！！

ザッシュ……！！ ザッシュ……！！

暁

「くっ！」

暁は、痛みに顔をしかめさせる。

釈迦堂

「そらそらあ、どうした！！ さっき言ったのはでまかせかあ！！」

釈迦堂は、笑いながら、8枚のリングを意のままに操り、直も暁の

身体を切り刻んで行く。

暁

「はあゝ……………調子に乗るなよ」

暁はため息を吐き殺気を込めた声でそう言い放った。

ゾクッ！！！！

釈迦堂の背中に悪寒が走る。

暁

「はあああああ……………」

暁は、息を吐き出しながら、両手に気を集中させた。

そして、光速の速さで飛んでいるリングそれを上回る速さで掴んだ。

釈迦堂

「な、何イイイイ！！！！リングを掴んだだと！！！！」

そして暁は、リングを粉々に握りつぶした。

粉々になったリングはゆっくりと消えていく……………。

暁は、全身の気を活性化させ、暁の身体あった傷がみるみる治っていく。

釈迦堂

「瞬間回復だと……………！？」

瞬間回復とは、武術を極めた者だけが使用できる奥義の一つ。

細胞などを気で活性化させいかな攻撃を受けても即時に自動回復するという

ある意味バグ技である。

百代は、驚いていた自分と同じくらいの少年が、自分の遙か先にある

武の境地に辿り着いていることに……。

百代は啞然としていたが、すぐに笑い、

百代

「ハハ！面白いぞアキラ！ 私は自分が強いと思っていたが、
まだまだだったようだ！」

本当にうれしそうに百代はそう言った。

それを聞いていた釈迦堂もふつと笑い

釈迦堂

「ああ……、俺は天才だと思っていたが、どうやら間違いだったようだ……」

釈迦堂はどこか虚しそうに言った。

そして、表情を変え、物凄い殺気を込めた目で暁を睨みつける。

釈迦堂

「認めてやるよ！ 天錠 暁！ 最高の敵としてなあ！！！」

そういうと釈迦堂は、全身の氣を左拳に集中していく。

暁

「悪いけど、もうあなたの攻撃は受けない」

その瞬間、暁の全身の氣が一気に上昇し、暁の背後に何やら巨大な人型が現れる。

鉄心

「なんじゃ、あれは！」

暁

「顕現のき、阿修羅！！！」

そう言うと、暁の背後にいる巨大な物体が姿を変え、6本3対に顔が3面の鬼神が現れる。

釈迦堂

「な……な……！！！」

釈迦堂は驚いて身動きができない。

暁

「はあああああ！！ オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
！！！！！！」

阿修羅は、J〇J〇のあるスタンドよろしく嵐のような拳の連打を

釈迦堂に浴びせる。

釈迦堂

「へび……！ あふ……！」「ふうふうふう……！」

釈迦堂は、凄まじい連打により、すでにボロボロだった。

暁

「これで終わりだ……！」

そう言って、釈迦堂の腹に強烈な一撃を喰らわした。

釈迦堂

「ぐはあああああ……！」

釈迦堂の口から大量の血が吐き出される。

そして、釈迦堂は仰向けで地面に倒れた。

鉄心

「釈迦堂お……！」

鉄心は、釈迦堂に駆け寄った。

釈迦堂

「ちい…… 全身が痛くて動けねえ……！」

釈迦堂は、意識を失っていなかったが、もう闘える状態ではなかった。

それを見て、鉄心が

鉄心

「釈迦堂、戦闘不能により、勝者、天錠 暁！」

そう高らかにその場で暁の勝利を宣言した。

その後、暁が、治癒巧で、釈迦堂の傷を治し、ついでに百代の怪我を治した。

ルー

「まさか、内氣功も使えると八、君は一体何者だい？」

暁は、その問いに顔を掻きながら、

暁

「ただ単に色々知ってるだけの小学生ですよ」

釈迦堂

「ケツ、その小学生に負けた俺らって一体、なあ、百代？」

百代

「そうですね、釈迦堂さん」

そういって、いじけている二人は暁とじっと見た。

暁

「あは……アハアハ……」

暁は、顔を引き攣り愛想笑いをする。

鉄心

「一つ聞いても良いかのう、暁君」

鉄心が真面目な顔で訊ねる。

暁

「はい、なんでしよう?」

鉄心

「君の信念とはなんじゃ?」

暁

「俺は、目に映った人達や大切な人達、そしてセカイを護りたい」

鉄心

「ほほお、全てを護る道かあ……それは、生半可な道ではないぞ」

鉄心が真面目な顔をして言った。

暁

「ええ、分かってます、でもコレが俺の貫きたい信念ですから……他人にどう思われようとこれだけは譲れません」

そういつて、真剣な目で鉄心を見つめる。

鉄心も暁の本気を感じたようで、

鉄心

「なるほどのつ、でもセカイとは？」

そう訊ねると

暁

「あーいつ輩からです……姿を現せ！」

そう、誰もいない方向に暁が叫ぶと、

いきなり白いコートに黒いシャツを着たガラの悪い黒髪の男が現れた。

?????

「へえ、やるじゃねーか。俺の気配に気づくなんてよお！」

男は邪悪な笑みを浮かべながらこちらを見てそう言った。

暁

「あんだだけ殺気出してたら分かるだろつ、普通」

暁は呆れた感じでそう言った。

?????

「ハッ、確かにワザと殺気を出した」

男は悪びれる様子もなくそう踏ん返り返って言った。

暁

「お前、一体何者だ？」

暁は、男の只ならぬ気配を感じ、呆れた表情から険しい表情に変わり男に訊ねる。

男は自分の名前を獰猛な笑みを浮かべたまま言った。

?????

「俺の名は、マンモン・グリード。ネガ・マリスより生まれし、【強欲】の使徒さ!」

e c o n t i n u e d

t o b

第6話 『決着！ そして現れた敵』（後書き）

作者「釈迦堂との戦いの決着付きました」

暁「それはいいが、とうとう敵が現れたな」

作者「はい」

暁「ちなみに敵の彼のモチーフは、神咒神威神楽の凶月 刑士郎だ」

作者「まあ、誰？と思った人は検索すればできます」

暁「c v イメージは、谷山 紀章さん、とあるの魔術のステイル役の人だ」

作者「という事で、次回、第7話 『強欲の使徒襲来』でまた会いましょう」

暁「では、またなあ」

第7話 『強欲の使徒襲来』 (前書き)

とうとう現れたネガ・マリスの使徒。続きをご覧ください。

第7話 『強欲の使徒襲来』

マンモン

「俺の名は、マンモン。グリード！ ネガ・マリスより生まれし、
【強欲】の使徒さー！」

マンモンと名乗った男は、高らかにその名を言った。

暁

「……………！ ネガ・マリスだと!?」

暁は、驚いている。

マンモン

「その名を知っているという事は、お前……………【神の代行者】エージェントか」

マンモンは、険しい表情になり暁を物凄い殺気の籠った眼で睨みつける。

暁

「……………ああ」

暁は静かにその事を肯定し、拳を構える。

その様子にマンモンは苦笑して、

マンモン

「まあ待て、今日は争う気はない。今日は顔見せが目的だしな」

暁

「? どういう事だ?」

暁は、納得いかない顔をしてマンモンにその真意を問う。

マンモン

「観た所、お前まだ代行者なりたてだろ?
そんなやつ倒しても面白みがない」

暁

「なっ!」

暁は、マンモンのその言葉に言葉を失う。

マンモン

「だが、このまま帰るのも癪なんでなあ、
面白いものを見せてやろう」

そういうとズボンのポケットから見た事のあるメダルを2枚取り出した。

暁

「それは、セルメダル!？」

マンモン

「へえ、これを知ってるのか、なら
これからやる事も分かるよな」

ニヤニヤしながらマンモンはそう言った。

暁

「ま、待って!!」

マンモン

「待たなえーよ! そら!!」

すると釈迦堂と百代の額にメダルを入れる穴が現れ、投げたメダルが入っていた。

釈迦堂

「な、なんだ!？」

百代

「これは……!!」

釈迦堂と百代からヤミーという怪人が出てきた。

一子

「キヤアアアアアア……!!!!」

一子が恐怖のあまり叫ぶ。

大和

「あれは一体……」

大和は動揺している。

卓也

「か、怪人だ!!」

岳人

「オイオイ、まじかよお!!」

モロとガクトも驚いている。

翔一

「すげー！ 初めて怪人を見たぜ！」

キャップだけ目を輝かせ興奮している。

ル一

「アイヤー!! 化け物ネー」

鉄心

「物の怪か!？」

鉄心達も驚いている。

出てきた2体のヤミーは、脱皮のように外皮がはずれ、

それぞれ、釈迦堂から出てきたヤミーは、ウルフヤミー（以降、ウルフY）に

百代から出てきたヤミーは、タイガーヤミー（以降、タイガーY）へと姿を変えた。

マンモン

「ハッハッハ!! 気にいってくれたかい？ 俺のプレゼント達は」

暁

「貴様ああああ……！」

暁は、怒りを顔にしマンモンに向かっていく。

しかし、マンモンの前に先程の2体が行く手を阻む。

TY

「ここから先は通さん……！」

WY

「マンモン様には指一本たりとも触れさせん……！」

そう言つて、2体は構えた。

暁

「邪魔だ、どけええ……！」

マンモン

「じゃ、後は任せた。俺はこれで失礼させてもらつぜ、何しろ準備がまだでな」

暁

「準備だと……！」

マンモン

「まあ、生きてたら次は相手をしてやるぜ、じゃーな……！」

そういつて、マンモンは一瞬にして姿を消した。

暁

「チィ、逃げられたか、厄介なやつら置いていきやがって!!」

暁は悔しそうにそうぼやいた。

釈迦堂

「暁！ そいつらは一体何なんだ？」

暁

「こいつらは、ヤミー。人の欲望を具現化した化け物です」

百代

「人の欲望を具現化だと？」

そついうとタイガーYが、口を開いた。

タイガーY

「左様、お主たちの強い奴と戦いたいという欲望から我らは生まれ
た……」

ウルフY

「ああ、その通りだ。俺達は、お前達より強い奴らを全員ぶち殺す
!!」

百代

「それは違う!! 私は強い奴と戦いたい、殺すなど考えていな
い!!」

釈迦堂

「たしかに強い奴と戦いてえ、だがな、それはお前らがやることじ
やね!!」

引つこんでろ！！ あとな！ 強い奴を全員ぶち殺す？
そんな面白くないこと誰がやるかボケえ！！」

暁

「あいつらに何を言っても無駄ですよ、二人とも。

あいつらは、たしかに生まれた人間の欲望からできているが、
その人の欲望を間違った形でやろうとするそういうやつらですか
ら」

それを聞いて、釈迦堂と百代は、2体のヤミーを睨みつける。

百代

「私も戦うぞ、アキラ！！」

釈迦堂

「俺も戦うぜ、こいつが俺からでてきたなんて胸クソ悪りいからな
！！」

暁

「うんじゃ、3人で行きますか！！」

釈迦堂・百代

「おう！」

そういうと百代は、タイガーYへ釈迦堂は、ウルフYへ飛びかかっ
た。

百代

「はあああああ！！ 川神流・無双正拳突きいい！！！！！！！！」

百代の渾身の一撃がタイガーYに襲いかかる。

釈迦堂

「オラああああ!! 川神流禁じ手・富士砕きいいいい!!!!!!」

釈迦堂の全てを破壊する必殺の一撃がウルフYを捉える。

……が、しかし、

タイガーY

「フン!! 川神流・無双正拳突き!!」

ウルフY

「ハッ!! 川神流禁じ手・富士砕き!!」

釈迦堂・百代

「!!!!」

2体は、百代達が放った同じ技で返してきたのだ。

お互いの拳と拳がぶつかり合い、凄まじい旋風が起こる!!

百代

「ぐぐぐぐ……!!!!」

釈迦堂

「く……!!!!」

お互いに一步も譲らない感じだったが、

タイガーY

「ふん!!」

ウルフY

「ハッ!!」

ヤミー達のほうが威力が上だったようで、二人は吹っ飛ばされ、壁に激突した。

百代

「がつ!!」

釈迦堂

「ぐはあ!!」

暁

「釈迦堂さん！ 百代さん!!」

暁は全身の氣を爆発させ、一瞬にしてヤミー達との距離を詰めた。

暁

「喰らえ!! 荒れ狂う殺劇の宴！ 殺劇舞荒拳!!」

ヤミー達にまるで激しい舞を踊っているかの如く、暁が攻撃する。

下段回し蹴りから始まり、パンチ、蹴り、掌底破、飛燕連脚、飛び込み蹴り、

アッパー、サマーソルトと最後にアッパーを決めた。

タイガーY

「ぐっ!!」

ウルフY

「くっ!!」

2体に全ての攻撃を当てたのにかかわらず、

2体は倒れなかったむしろ、ダメージがない。

ウルフY

「それで終わりか？」

タイガーY

「話にならない」

そういうと2体の姿が消え、暁の全身に激痛が走る。

暁

「ぐわああああ!!!!」

2体は、暴風の如く、暁の身体に傷をつけてダメージを与えていく。

暁

「い、いいかげんにしろ!!」

暁はついに切れ、回し蹴りで2体を退けた。

暁

「はあ…… はあ…… 仕方ねえ、ヤミーが相手ならこれだー!!」
そういつて、左腕を横に突き出す。

暁

「create!! 我、望みしは欲望の怪物を倒す者のベルト!!
現れ出でよ! オーズドライバー!!」

すると左手に3枚のメダルを入れるくぼみが付いた銀色のベルトが
現れる。

タイガーY

「それは、まさか!?!」

ウルフY

「オーズドライバーだと!?!」

暁は、動揺している2体を見て笑みを浮かべ、オーズドライバーを
腰に巻きつけた。

暁のポケットからは、赤・黄・緑のコアメダルがでてくる。

暁

「それじゃ、変身!!」

カシャッ! カシャッ! カシャッ!

暁は、三枚のコアメダルをベルトにセットし、

オーズドライバー中央の部分を斜めにずらし、オースキャナをス

ライドさせる。

カシャッ！ ドゥーン ドゥーン ドゥーン ティントウントウン！

ドライバー

「タカ！ トラ！ バッタ！」

シャリン！ シャリン！ シャリン！

暁の周りを赤・黄・緑のエネルギー体のメダルが周り、

ドライバー

「タトバ タトバ タトバ！」

ピカリン！ キャシーン！

暁の全身は、3色怪人に変化していた。

それだけではなく、背も成人男性の身長の高さに変化している。

タイガーY

「オーズだと！！！」

ウルフY

「バカなこのセカイにやつはいないはず！！！」

暁

「ああ、借り物だけどな、強さは本物だ！」

その姿を見て驚いた鉄心は暁に訊ねる。

鉄心

「暁君、お主は一体……」

暁

「俺は神の代行者^{エージェント}。セカイに害をなすものを排除せし者^ツつてところですかねえ」

暁は、笑ってそう言う。

暁

「さあ、ヤミー共、オーズが相手だ!!
かかってきやがれ!!」

ヤミー達と暁^{オーズ}の闘いが始まる……

continued……

t
o
b
e

第7話 『強欲の使徒襲来』（後書き）

暁「やつちまったな、駄作者」

作者「ええ、勢いでやつちまいました……

でも後悔はしない!!」

暁「開き直るな!!」

スパーン!!（作者が暁にハリセンでシバかれた音）

作者「何も叩く事無いでしょうが!!」

暁「なんで、オーズなんだ!

あれか、グリード繋がりがこんちくしょう!!」

作者「ああ、そつだよ、こんちくしょう!!」

二人が取っ組み合いの喧嘩を始めた為、しばらくお待ちください

30分後経過

作者「はあゝ、はあゝ」

暁「ぜえ…… ぜえ……」

作者「とりあえず、次回予告を」

暁「ああ…… ぜえ…… ぜえ……」

作者「じ、次回、第8話『オーズ参上!!』 語られた秘密』で
またお会いしましょう!! はあ、はあ」

暁「ぜえ…… またな」

第8話 『オーズ参上!! 語られた秘密』 (前書き)

マンモンが置いていた2体のヤミー達に対抗する為暁は、仮面ライ
ダーオーズになったのだが……

第8話 『オーズ参上!! 語られた秘密』

ヤミー達とオーズになった暁が、闘おうとしたその時、

辺りの空間が歪み、一人の男が現れた。

???

「あれ、ここどこだ? ってヤミー!?!」

男は驚いている。

男の服装は民族衣装的な感じの服に癖っ毛のある髪型。

暁は、その特徴である人物を思い出した。

暁

「あなたは、火野 映司さん?」

男は、自分の名前を呼ばれ暁のほうを見る。

映司

「ええええええ!!!! オーズがなんでここに! というか俺変身してないし!」

映司は混乱している。

暁

「とりあえず、話は後です。先にヤミーを」

映司

「わかった。でも、オーズドライバーは壊れて無くなったし……」

映司は、真木博士との闘いでオーズドライバーと大切な相棒を失ったのだった。

暁

「なら、ちょっと待って下さいね」

暁は、襲いかかってくる2体のヤミーを蹴り飛ばし、映司にそう言った。

暁は、創造の力を使い、もうひとつオーズドライバーを出した。

暁

「映司さん!!」

そう言って、オーズドライバーを映司に投げる。

映司

「おおっと、これはオーズドライバーと3枚のコアメダル。 よし、これなら!」

そう言って、受け取ったオーズドライバーを腰に巻き、3枚のメダルをセットする。

カシャッ! ドゥーン ドゥーン ドゥーン ティントウントウン!

オーズドライバー中央の部分を斜めにずらし、オースキャナ をスライドさせる。

ドライバー

「タカ！ トラ！ バッタ！」

シャリン！ シャリン！ シャリン！

映司の周りを赤・黄・緑のエネルギー体のメダルが周り、

ドライバー

「タトバ タトバ タトバ！」

ピカリン！ キャシーン！

映司は、仮面ライダーオーズへと変化した。

大和

「同じやつが二人！？」

大和達は驚いている。

その姿は、正に正義の味方だった。

タイガーY

「オーズが二人だと！？ ウルフY一気に片を着けるぞ！」

ウルフY

「おう！ 行くぞオーズ共！！」

そういうとウルフは両腕でソニックブームをタイガーは、口から炎を吹いた。

しかし、二人のオーズは、その攻撃を交わし、

暁

「映司さん、俺は虎のやつを。もう一体の狼のほうはお願いします
！」

映司

「分かった！」

そういうと映司は、メダジャリバー（セルメダル満タン状態）を持ちウルフYに向かって行った。

暁

「俺は、コンボで一気に！！」

そういうと赤と黄色のコアメダルを引き抜き、

足と同じ緑色のコアメダル2枚をセットし、スキャンさせる。

カシャッ！ ドゥーン ドゥーン ドゥーン ティントウトウン！

ドライバー

「クワガタ！ カマキリ！ バッタ！」

暁の周りを緑色のエネルギー体のメダルが周り、

ドライバー

「ガタガタガタキリバ ガタキリバ！」

ジャキンー！！

暁は、ガタキリバコンボになった。

暁

「ハッ！！」

暁が気合いを入れて声に出すと分身が15体現れる。

そして、オースキヤナ でメダルをスキャンし、

ドライバー

「スキャンングチャージ！！」

15体の分身と共にタイガーY目掛けて一斉に跳び蹴りを叩き込んだ。

タイガーY

「がはあ！！」

タイガーYは、碎け散り、かなりの枚数のセルメダルになった。

映司

「コンボをも使えるなんて君は一体……。それはともかく俺もやるか！」

映司もオースキヤナ でメダルをスキャンし、

ドライバー

「スキャンングチャージ！！」

映司はメダジャリバーを構え、空間もろともウルフYを一刀両断した。

ウルフY

「な、何だと……」

ウルフYは爆発し大量のセルメダルに戻った。

こうして、二人のオーズは、ヤミー達を撃退したのだった。

鉄心

「暁君、お主はいったい何者だ？」

暁を問いかける。

暁

「（さて、どういいわけしても納得してもらえないが……）」

正直に話すかごまかすかで悩んでいると

ルカ

「（話していいですよ）」

暁

「（ル、ルカさん！？ いいの？）」

ルカ

「（はい、かまいませんよ。ネガ・マリスの使徒がでてきたからには、

仲間は多いほうがいいですから）」

暁

「はあく、お答えします。実は……」

それから鉄心達に自分の正体と目的とあの化け物と

その背後にいる敵の事もそこにいる全員に話した。

鉄心

「なるほどのう、神の代行者か……あの化け物を見なければ信じられなかったのう」

暁

「それが普通の反応だと思えますよ」

翔一

「本当の正義の味方か……すげえ!!」

翔一は目をキラキラさせて興奮してる。

大和

「師匠はやはりすごい人だったんだ、うんうん!」

大和は、自分が師事をお願いした人がやはりすごいと分かったので嬉しそうだ。

一子

「暁は、凄いだね〜」

ワン子は素直に感心している。

岳人

「やはり師匠はすごいぜ!！」

こちらも大和同様うれしそうだ。

卓也

「本当に暁は驚かせてくれるね〜、アハハ」

卓也は笑っている。

百代

「強いのも納得だな、また試合しような!！」

百代もいい対戦相手が見つかって嬉しそうだ。

釈迦堂

「たしかにおもしろいガキだよ、おまえは、ハッハッハ!」

釈迦堂も歳の離れた強敵ライバルの出現に嬉しそうだ。

ルー

「私も精進せねばネエ〜」

ルーは、決意も新たにがんばるようだ。

暁はその様子を見て

暁

「キヤップ、それは違う。俺は正義の味方じゃない。

俺は、大切な人達やその周りの人達それとセカイを
ただ護りたいだけなんだ」

暁のその言葉に全員思ってしまった。

じゃ、お前は誰が護るんだ？つと

翔一

「よし！ お前は俺が……いや、俺達が護ってやる！！」

暁

「え？」

鉄心

「つむ、俺もお前を護ってやる」

ル一

「頼りないかもしれないが、ワタシも」

釈迦堂

「ケツ！ 闘う相手がなくなるのも癪だし、護ってやるよおまえ
をよ！」

釈迦堂は、ぶっきらぼつにそう言った。

暁

「皆、ありがとう……」

映司

「（なるほど、この子も前の俺と同じかも知れないな）」

映司は思い出していた昔の自分を……

そして、大切な相棒を……

すると映司のズボンのポケットから赤い光が漏れている。

映司

「これは……」

ポケットに手を突っ込み、中の物を出してみると半分ずつに割れた赤いコアメダルが光っている。

光は激しくなり、強い光でその場にいた全員が目を瞑った。

5分後　　光が収まり、目を開けると割れていた赤いコアメダルは元通りになっていた。

映司

「え？」

すると映司のポケットに入っていた別の赤いコアメダルと暁が持っていた赤いコアメダルが、

先程の大量のセルメダルの上に飛んで行き、最後に手に持っていたコアメダルがその場所に

飛んでいくと、セルメダルが宙に上がり、人の形を作り始めた。

映司

「ま、まさか……」

するとコアメダル3枚を中心に人の形をしたセルメダルの集合体は、
ガラスの悪い金髪の青年へと姿を変えた。

映司

「アंकク!!」

それは映司にとって最高の相棒の姿だった。

アंकク

「……ん？　ここ、どこだ？」

アंकクは辺りを見回すと映司の姿を発見する。

アंकク

「映司！　ここはどこだ、説明しろ？」

そのいつもと変わらない口調でアंकクはそう言つと

映司

「相変わらずだな、アंकク」

映司は嬉しそうにまたは呆れたようにアंकクに答えた。

それからアंकに今までの経緯を説明すると

アंक

「何？ 俺達以外のグリードだと？」

暁

「正確に言えば、違うもんなんですけどね」

アंक

「あん？ お前誰だ？」

暁

「俺の名前は、天錠 暁。よろしくお願いします。グリードのアंकさん」

そういうと鉄心達川神院勢が構える。

アंक

「……なぜ、それを知っている？」

アंकが苛立ったようにそう暁に問いかける。

暁

「俺が、神の代行者だからです」

アंक

「なんだと！！ 神の代行者だと！！」

映司

「あ、アंक知ってるの？ 神の代行者の事」

アंक

「ああ、俺達が生まれる数千年前にはいたからな」

アंकは苦虫を噛みしめたみたいな顔でそう言った。

暁

「まあ、俺は最近なつたばかりなんですけどね」

映司

「そういえば、オーズになっている時、背伸びてなかった？」

当然の疑問である。

暁の今の姿はどう見ても小学生だからだ。

暁

「それはですね……」

暁は、映司に小さな声で耳打ちした。

映司

「なるほど」

百代

「なんで、そこだけ耳打ちなんだ？」

暁

「それは大人の都合上の問題です」

百代
「？」

百代はその答えに首を傾げた。

暁

「とりあえず、説明は以上かな」

??

「ちょっと待って下さい」

全員がその謎の声に辺りを見回す。

すると全員の集まっている中央に突然、綺麗な女性が現れる。

暁

「ル、ルカさん？」

ルカ

「お久しぶりねえ、暁君」

鉄心

「この綺麗な女性は誰かのう？」

ルカ

「いやですわ、綺麗だなんて」

そういうとルカは、いやんいやんといった感じで体をくねらせ恥ずかしかる。

アंक

「何いいいい！！！！！！」

復活した本人が一番驚いている。

映司

「なぜ、アंकを復活させたんですか？」

ルカ

「それはですね、あなた達のセカイに今危機が訪れようとしています！」

映司・アंक

「！」

ルカ

「その為に映司さんをこのセカイに連れてきました」

映司

「何で…… ハッ！」

どうやら映司は、ルカの思惑を理解したようだ」

ルカ

「ええ、お気づきの通りです」

新しいオーズドライバーの受け渡しとアंकの復活、それが今回の目的のようだ。

ルカ

「ではさっそくですが、お二人とも元のセカイに戻しましょう」
ルカがそう告げると映司が

映司

「あ、ちよつと暁君に一言いいですか？」

ルカ

「はい（ニコッ）」

暁

「なんですか？ 映司さん」

映司

「暁君、何でもかんでも一人で背負い込むなよ」

暁

「え……」

映司

「君の周りには頼れる仲間がいるだろ？」

そう言うと映司は笑顔になる。

暁は、その笑顔と言葉を理解し、

暁

「はい！」

暁は元気にそう答えた。

ルカ

「それでは参りましょう」

映司

「はい！」

アंक

「チッ！ 仕方がねえ」

映司は元気な声で、アंकは仕方なさそうにそう言い、

ルカ

「では、皆さんごきげんよう」

映司

「暁君、何か困った事があればすぐこっちに来るから！」

暁

「はい！」

そういつて、三人は一瞬のうちに消えた。

t
o
b
e
c
o
n
t

i
n
u
e
d
.....

第8話 『オーズ参上!! 語られた秘密』 (後書き)

暁「とりあえず、本人達でできたな」

作者「はい……」

暁「まあ、今後と言っても高校生編で又出てくるしね」

作者「ってネタバレダメでしょ!!」

暁「べつにいいじゃないか。減るもんじゃないし」

作者「そうはいつでもねー」

暁「あー、うるさい」

作者「うわー、自分でやった癖に逆切れですか」

暁「それは置いて次回予告しないといけないんじゃないのか？」

作者「ぐっ、いつか酷い目にあわす。

ということで次回 第9話『京と小雪 二人の少女 (京編)

』で

また会いましょう!」

暁「うんじゃ、またな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9214y/>

A.O.G -Agent Of God- ~真剣で代行者に恋しなさい!~

2011年12月4日01時50分発行